

# 徐京植さんを偲ぶ会

## 資料・メッセージ集 [配信版]

日時：2024年4月20日（土） 14：00～17：00（開場 13：30）

会場：進一層ホール（東京経済大学 国分寺キャンパス 進一層館 1階）

### 《タイムテーブル》 \*敬称略

14：00 開会

開会挨拶 岡本英男（東京経済大学学長）

徐 勝（元立命館大学特任教授、東アジアの人権と法） ※ビデオメッセージ

宋 連 玉（青山学院大学名誉教授、朝鮮近現代ジェンダー史）

鶴飼 哲（一橋大学名誉教授、フランス現代思想・文学）

高橋哲哉（東京大学名誉教授、哲学）

眞鍋かおる（「高文研」編集者）

澁谷知美（東京経済大学教授、社会学・ジェンダー研究）

李 静 和（成蹊大学教授、政治思想）

15：30～15：40 休憩

15：40～16：05 徐京植さんインタビュー映像

鎌倉英也（NHK エグゼクティブディレクター）

崔 在 燮（「聯立書架」編集者・翻訳家・美術史家） ※ビデオメッセージ

大田美和（中央大学教授、歌人、英文学）

李 杏 理（東京経済大学専任講師、在日朝鮮人・朝鮮ジェンダー史）

早尾貴紀（東京経済大学教授、パレスチナ／イスラエル研究）

ご挨拶 船橋裕子

17：00 閉会

主催：偲ぶ会実行委員会（東京経済大学教職員有志）

※ 収録動画の公開：以下のリンクアドレスを直接クリックしてご覧ください（検索では出てこない設定です）。

<https://youtu.be/TzDwg4Dq7DU>

## 《目 次》

	頁
1. 「偲ぶ会」タイムテーブル	1
2. 徐京植絶筆（『アメリカ人文紀行』あとがき）	3
3. 徐京植 略年譜・主要著作・主要出演映像作品	7
4. 早尾貴紀「徐京植さんとその時代 ― 批評家として、活動家として、教育者として」	10
5. 徐勝「京植を悼む」 *ビデオメッセージより	15
6. 崔在赫「徐京植先生を慕って」 *ビデオメッセージより	18
7. お寄せいただいた追悼メッセージ	21
韓 承 東（元『ハンギョレ新聞』記者、作家・翻訳家）	21
佐喜眞道夫（佐喜眞美術館館長）	23
増田常德（画家）	24
古川美佳（朝鮮美術文化研究）	26
金 富 子（東京外国語大学名誉教授、植民地朝鮮ジェンダー史研究）	27
丸川哲史（明治大学教授、東アジア文化論）	28
中村一成（ジャーナリスト）	30
高 和 政（中央大学附属高等学校教員、東京経済大学元非常勤講師）	31
崔 徳 孝（米・メリーランド大学カレッジパーク校助教授、東アジア国際関係史）	32
池 允 学（東京経済大学卒業生）	33
濱村美郷（東京経済大学・徐京植ゼミ卒業生、在ソウル）	35
権 赫 泰（韓国・聖公会大学教授、日韓関係史・日本現代史）	36
8. 韓国・日本の新聞報道（訃報）紹介	42
『ハンギョレ新聞』2023年12月19日 訃報	
付：参考 韓国におけるその他の訃報関連記事	
『信濃毎日新聞』2023年12月19日 訃報	
	※配信版では、掲載記事の書誌情報のみ記載
9. 関連追悼行事紹介（韓国・聖公会大学 追悼シンポジウム 7月12日開催）	43

※以上、敬称略

## 徐京植 絶筆

### おわりに — 善きアメリカの記憶のために（『アメリカ人文紀行』）

人文紀行シリーズの最新刊として「アメリカ」を取り上げたのは2016年のことである。この間に7年余もの歳月が去った。このシリーズの過去の2冊『メデューサの首 — 私のイタリア人文紀行』と『ウーズ河畔まで — 私のイギリス人文紀行』も決して素早く気軽に書き上げたものではないが、それにしても今回は時間がかかった。率直に告白すると、予想外に苦しい執筆だった。

その苦しみの理由は、大きく言って二つある。一つは個人的な理由。この間に私は職場を定年退職したが、それがちょうどコロナ禍の時期と重なり、個人生活に少なからぬ変動があった。体調も変調をきたした。

だが、そのこと以上に、この間の世界と東アジアにおける様々な政治的変動は極めて目まぐるしく、それを一つ一つ追いかけていると際限がなくなってしまうのだった。また、ウクライナ戦争がその好例だが、それら変動そのものがある意味では従来から存在していたものの新味のない繰り返し（まさにアレクシエーヴィチの言う「セカンドハンド」）であるため、執筆・描写する側にとっては切り口が困難なのである。

その上、「アメリカ」という対象が、厄介であった。本書では、私が最初に訪れた80年代のアメリカから始まって、トランプの登場と退場（再登場？）に至る時期を扱っているが、この間にアメリカ社会の「分断」が急速に進んだ。いや、すでにあった「分断」が誰の目にも明らかなほど露わになったと言うべきだろう。

分断された米国は衰退の道を着実に転落しつつある。だが、この断末魔はまだ長く続き、多くの腐敗と破壊を重ね甚大な損傷を人類社会に与えるだろう。米国が（そして世界が）変わるということは、それほど長く困難な道である。

このような「アメリカ」を一個の対象として捉え、その全体像を描写することなど可能だろうか？ 私が知っている「アメリカ」は、ほんとうにアメリカなのだろうか？ あからさまな差別主義者トランプが登場し、大統領にまでなった時、「これがアメリカか？」と思った。しかし、その瞬間、一方には「これこそがアメリカだ」と意を強くした人々が存在したのである。その人々はアメリカの内にも外にも広汎に存在している。

私が知っているのはアメリカのごく限られた一部分でしかない。それでも、その分断された断片の中から、私が「善きアメリカ」と思う部分（それはベン・シャーンやエドワード・サイドに現れている部分である）に的を絞って語ることにした。そうした理由は、私自身のこの「善きアメリカ」への愛惜によるが、米国という国家がこの「善きアメリカ」の方向に進んでほしいという期待を簡単に捨てられないからである。現状ではそうなる期待は薄い、そうならなかった場合でも、私という極東出身のディアスポラの目に映った「善きアメリカ」の記憶を遠い将来のために残しておくことも、無意味ではないだろうという思いもある。少なくとも、あの若かった日々、私の暗黒時代に、「善きアメリカ」は私を励まし、力を与えてくれたのだ。

2022年2月のロシアによる侵攻から現在まで、ウクライナでの戦争は継続中である。さらにパレスチナのガザでは、米国を後ろ盾とするイスラエルによる「ハマス」殲滅作戦が現在も進行中だ。本文中で触れたガザの人権弁護士ラジ・スラーニ氏は自宅を空爆され、九死に一生を得て、エジプトのカイロに脱出したという。

ウクライナでもパレスチナでも、戦闘は長期化し、膨大な犠牲者、難民を生み出しながら、終息の見通しすら立たない。限りなく血が流され、女性や子供たちの泣き叫ぶ声が響き続ける。内戦状態の域をはるかに超えて、準世界大戦とも呼ぶべき状態が続いている。第二次世界大戦後の国際秩序を曲がりなりにも支えて

きた国連は完全に機能不全に陥っている。

この戦争によって、私自身の精神も大きく揺さぶられ続けている。70年余りの人生を通じて見てきた世界が、ここではっきりと大きく変わろうとしている。ここに至るまでに、ロシア国内やベラルーシでの民衆運動に対する激しい弾圧があった。香港やミャンマーも同様である。私の暗い予感、次々に現実化してきた。現実が、私の悲観的予測を追い越してしまう時がある。

私は1951年生まれである。日本で生まれたが、その時には独立して平和を享受するはずだった祖国ではすでに内戦（朝鮮戦争）が始まっていた。その戦争は甚大な犠牲を出して1953年に「休戦」となったが、その後70年余が経った現在も休戦状態が続いている。戦争は終わっていないのだ。

いったいどれだけ破壊すれば「終わる」のか？どれだけ殺せば「終わる」のか？私の生きてきた70年余の人生において、世界に戦争のなかった時期はない。戦争の黒い影は、常に鬱陶しく垂れ込めていた。その影が、日増しに濃くなっていく。

アウシュヴィッツの生存者で作家のプリーモ・レーヴィに『休戦』という作品がある。「終戦」ではなく「休戦」である。

ソ連軍によるアウシュヴィッツからの解放後、レーヴィは同じく強制収容所生存者の「ギリシャ系ユダヤ人」のモルド・ナフムと知り合い、放浪の旅を同行することになる。狡智にたけた商人である「ギリシャ人」はレーヴィにとって現実を生き抜くための厳しい師匠となる。例えば次のように。

アウシュヴィッツでの囚人服しかなく、ありあわせの靴がすぐにダメになったレーヴィに「ギリシャ人」は、「おまえはばかだな」と言った。「靴を持っていないやつはばかだ」。靴があれば食料を探しに歩き回ることができるが、靴がなくてはそれもできない」というのである。「反論は不可能だった。その論旨の正しさは、目に見え、手に触れることができた。」

この「ギリシャ人」のおかげで、アウシュヴィッツを出たばかりのレーヴィは、混沌の中を少しずつ歩き始めることができた。その「ギリシャ人」は「戦争は終わっている」というレーヴィに「いつも戦争だ」と「記憶すべき答え」を吐いた。

「私たちはラーゲル（強制収容所）を経験した。私はそれを、私の人生や人類の歴史の奇怪な歪曲、おぞましい例外とみなした。だが彼にとっては、周知のことの悲しい確認でしかなかった。「いつも戦争だ」人間は他人に対しては狼だ。」

「いつも戦争だ」…この長い作品の冒頭近くに現れる挿話が、作品全体の主題である。この作品は戦勝と解放の歓びでは終わらない。不吉な深淵から語りかけるような予言とともに終わるのである。解放から8ヶ月後に、辛うじてイタリア・ミラノの生家に帰還できたレーヴィは、それでも悪夢に苦しめられ続ける。収容所で毎朝浴びせられたポーランド語の号令「フスターヴィチ（起床）」に、ミラノの生家でも眠りを破られるのだ。レーヴィは、自分がいるのは東の間の「休戦」の中でしかないと思い知らされる。以後40年間を平和のための証人として活動したレーヴィは1987年、自殺した。

2022年7月23日、ミャンマー軍政はアウン・サン・スー・チー氏が率いていた与党「国民民主連盟(NLD)」の元国会議員と民主化運動活動家計4人の政治犯の死刑を執行した。正直に告白すると、この知らせは、私をかなり動揺させた。死刑そのものが人道に反する残虐刑であることはもちろんだが、それが全世界の衆人環視の中で平然と強行されたのであった。しかも、しばらく前まではミャンマーの民主化運動をあれほど熱心に報じていたメディアも、このことについては（少なくとも日本で見ている限り）わずかな関心しか示していない。つまり、すでに「陳腐化」したのだ。ベラルーシや香港の民主化運動も急速に陳腐化された。

この報道は、私の心理を急速に半世紀前に引き戻した。あの頃、韓国に母国留学中であった私の兄二人が政治犯として逮捕投獄され、兄の一人（徐勝）は軍事裁判で一時は「死刑」を宣告されていた（のちに「無期懲役」が確定）。もう一人の兄（徐俊植）は「懲役7年」を宣告されたが、非転向を理由に刑期満了後も

釈放されず、獄中生活は20年間ちかく続いた。この間、私は日本にいて、ただ精神をすり減らす日々を過ごしていた。心が騒いで熟睡できない夜が続いた。暗い部屋に横たわって「眠らなければ」と自分に言い聞かせるのだが、心臓の動悸音だけが延々と耳に聴こえ続けるのだった。私は、自分に言い聞かせていた。どんな無残なことでも、どんな理不尽なことでも、こうして実際に起こるのだと。

私の心をさらに消耗させたのは、そういう想像世界と、私の周囲で展開する日本社会の「日常生活」とのギャップだった。知人たちは「将来はどうするの?」「就職は?」「結婚は?」などと屈託なく私に尋ねた。私にとっては、そのような「日常生活」が虚構であり、暗い想像の中の監獄や刑場こそが真実だった。本書で語ったアメリカの旅に私が立ったのは、そういう時期だった。

ミャンマーでの処刑の報に接して、その当時の酸鼻な気分が、半世紀以上が経った現在、まざまざと甦った。あの時代は終わっていない。半世紀前の、あの私が真実の私であり、その後のどうにか平和に暮らしてきた私は虚構の産物に過ぎない。世界中で人々が殺され、病み、苦しんでいる時、真実はそちらにある。私がいるのは虚構の側だ。

ノーベル賞作家スベトラーナ・アレクシエーヴィチに『セカンドハンドの時代』〔日本語版:松本妙子訳、岩波書店、2016年〕という著作がある。思えば卓抜なタイトルだ。

ウクライナやベラルーシは「地獄」と称される独ソ戦の戦場となった。独ソ戦の犠牲者(戦死、戦病死)は、ソ連兵が1470万人、ドイツ兵が390万人である。民間人の死者を入れるとソ連は2000~3000万人が死亡し、ドイツは約600~1000万人である。ソ連の軍人・民間人の死傷者の総計は第二次世界大戦における全ての交戦国の中で最も多いばかりか、人類史上全ての戦争・紛争の中で最大の死者数を計上した。

それなのに、その同じ場所で、同じような戦闘行為、残虐行為が反復されている。そこで叫ばれているスローガンはアレクシエーヴィチの著作タイトルそのままに、すべて「セカンドハンド(中古品)」である。

この場合の「セカンドハンド」とは、「理念」の中古品という意味である。ソ連という実験が挫折し、社会主義の理念も崩壊した。ゴルバチョフの改革も新自由主義の跳梁跋扈を招き、貧富の格差は極大化し、民族間紛争も再燃した。旧ソ連を構成した国々の多くで権威主義の体制が築かれた。ウクライナ戦争も詰まるどころ、ソ連崩壊によってもたらされた事態である。「ユートピアの廃墟」。その廃墟で私たちはどう生きるべきなのか。なんとかして破壊された理想を再建しなければならない。だが、いかにして?

私の理解では現在の世界は、かつて「民主主義」「人権」「被抑圧民族解放」といった普遍的理想の旗のもとに、「ファシズム」「ナチズム」「天皇制軍国主義」という見えやすい「悪」と闘った結果の到達点と考えられて来た。それはいま思えば、困難と苦痛に満ちてはいても、多くの人々が「理想」を共有することのできた時代だった。

結局、何が失われたのか、「理想」が失われ、鉄腕だけが生き残ったのだ。いまはシニシズム(冷笑主義)が凱歌を上げ、「死の舞踏」を踊っている。「理想なき時代」が続いている。考えてみれば、はるか以前からそうであったのだ。第二次大戦でファシズム側が敗北し、冷戦がいったん終結した後、世界は平和を享受できる時代をようやく迎えたように思われた。しかし、それはごく短い時期に過ぎなかったようだ。トランプ支持者が多数を占める米国はもちろん、ヨーロッパをはじめ世界各地で、移民排斥を叫ぶ右派勢力が進出している。

ウクライナもミャンマーもすべて急速に『陳腐化』されていく。「ホロコースト」や「パレスチナ」でさえ、こうして陳腐化されるのだ。ガザでこの2ヶ月ほどの短期間に、およそ2万人の命が奪われた。国連での「人道的停戦」の決議案は、米国の拒否権によって葬り去られた(イギリスは棄権)。ガザという狭い地域に閉じ込められた人々に対する一方的な武力行使、まさしくジェノサイド(大量殺戮)が、公然と行われているのである。ここに「悪しきアメリカ」の醜い素顔が余すところなく示されている。もちろん、そのような自国のありように、少なからぬ犠牲を払って抗議している「善きアメリカ」の人々も存在しているが、その力は劣勢だ。ペンシルバニア大学とハーバード大学の学長が、職を追われようとしている。マス・ヒス

テリーとも現代版マッカーシズムとも呼ぶべき現象だ。いうまでもないことだが、反イスラエルと反ユダヤ主義とは次元も範疇も異なる概念である。これらの(しばしば意図的な)混同は問題解決の妨げでしかない。しかし、現実にはこうした「反人文主義」的言説の嵐が世界中で吹き荒れている。反知性の極みというべきである。こんな状況で「人文紀行」など書く意味があるのだろうか？ それとも、こんな状況だからこそ、「善き人々」を励まし、人文主義的思考の大切さを、粘り強く説かなければならないのだろうか。

ここで「アメリカ人文紀行」の筆を擱くことにする。

いま本書で言及した人々以外にも、数多くの好ましい人々の記憶が私の心に蘇っている。「アメリカ」とは何か。それは当然ながら、「アメリカ」という一体のものではなく、様々な互いに葛藤し抗争する複数の文化のぶつかり合う「場」のことだ。私は「アメリカ」が好きであり、同時に大嫌いだ。そして、このような極端な矛盾と抗争こそが「アメリカ」なのであろう。

本書の最初の前半で述べた私のアメリカ紀行の端的な目的は、アメリカ世論に、より具体的には「米国務省人権局」に訴えて、兄たちを含む韓国政治囚への虐待を、せめて少しでも軽減させることだった。その目的に私の旅がわずかでも効果があったとは思えないが、そういうことでもしなければ居ても立ってもいけない心境だった。それは考えてみれば矛盾に満ちた行為だった。韓国軍事独裁政権の後ろ盾であり、言い換えれば、韓国における人権弾圧の当事者でもある米国に、そのことを訴えるというのだから。

私はその当時のアメリカ滞在中に学んだことは、「人権」というものも、米政府にとっては、普遍的な理念というより、国益のための「資源」である、ということだ。そんな当然のことに遅まきながら気づかされた私は、それ以後、そのような前提に立って、米国という「場」を活用しようという考えになった。もちろん、私のような無力な者がそう考えたところで、何ができるわけでもないのだが。それでも本書を書きながら私は、そのような私、極東から来た若い政治犯家族に素朴な善意で接してくれた人々のことを、改めて思い出していた。こういう人々の小さな力が世界を変える、などと私には言えない。そう言うには私は暗黒ばかりを見過ぎてきたかもしれない。あるいはまだ暗黒を見るのが足りないのだろう。

だが、私は、今も少しもよくなる世界のあるあちこちで、日々現実に絶望している人々に、自分の経験の断片なりとも提示して参考にしてもらいたいと思う。これは私の終わりなき「人文紀行」の一章である。

(2023.12.17.)

## 徐京植（1951－2023）略年譜・主要著作・主要出演映像作品

### 【略年譜】

- 1951年2月18日 京都市に生まれる。
- 1966年4月 京都教育大学附属高等学校入学。
- 1969年3月 京都教育大学附属高等学校卒業。
- 1969年4月 早稲田大学第一文学部フランス文学科入学。
- 1971年4月 兄の徐勝・徐俊植が韓国留学中に逮捕。同年、第一審判決で徐勝に死刑、徐俊植に懲役15年の判決。救援運動始まる。
- 1974年3月 早稲田大学第一文学部フランス文学科卒業（文学士）。
- 1983年 初めてのヨーロッパ旅行。
- 1988年5月 徐俊植、17年ぶりに釈放。
- 1990年2月 徐勝、19年ぶりに釈放。
- 1991年4月 法政大学法学部兼任講師（91～99年度）。以後、静岡大学、法政大学大学院、立教大学、津田塾大学、千葉大学文学部にて非常勤講師を務める。
- 1995年6月 著書『子どもの涙』（柏書房）に対して、第43回日本エッセイストクラブ賞受賞。
- 1999年4月 東京経済大学現代法学部非常勤講師（「近代アジアの歴史と現実」担当）。
- 2000年4月 東京経済大学現代法学部専任講師に着任（「人権とマイノリティ」、「人権論」、「芸術論」等を担当）。
- 2000年5月 著書『プリーモ・レーヴィへの旅』（朝日新聞社）に対して第22回マルコポーロ賞受賞。
- 2002年4月 東京経済大学現代法学部助教授に昇任（2007年4月 准教授、制度変更に伴う職位改称）。
- 2006年4月 東京経済大学国外長期研究員（2006～07年度）、韓国・ソウルに滞在、聖公会大学客員教授。
- 2008年4月 東京経済大学現代法学部教授に昇任（2019年4月 全学共通教育センター教授、所属変更）。
- 2008年4月 東京経済大学同全学共通教育センター長（2008～09年度）。
- 2012年7月 第6回後廣（フグアン）金大中学術賞（韓国・全南大学主催）受賞。
- 2018年4月 東京経済大学図書館長（2018～19年度）。
- 2021年3月 東京経済大学を定年退職（名誉教授）。
- 2023年12月18日 長野県茅野市の自宅にて永眠。

### 【主要著作】 \*改版や韓国版は、特記なき限り同タイトル。韓国版のみ刊行の書籍には◆を付した。

- 1981年7月 （編訳）『徐兄弟 獄中からの手紙：徐勝、徐俊植の10年』岩波書店〈岩波新書〉
- 1988年1月 『長くきびしい道のり：徐兄弟・獄中の生』影書房 \*2001年1月 第2版、影書房
- 1989年3月 『皇民化政策から指紋押捺まで：在日朝鮮人の「昭和史」』岩波書店〈岩波ブックレット〉
- 1991年6月 『私の西洋美術巡礼』みすず書房 \*1992年 韓国版、創作と批評社
- 1991年8月 （共訳）白楽晴『知恵の時代のために：現代韓国から』オリジン出版センター ※李順愛と共訳
- 1994年11月 『「民族」を読む：20世紀のアポリア』日本エディタースクール出版部
- 1995年3月 『子どもの涙：ある在日朝鮮人の読書遍歴』柏書房 \*1998年1月 文庫版、小学館 \*2004年9月 韓国版、トルペゲ \*2019年4月 復刻版、高文研
- 1997年5月 『分断を生きる：「在日」を超えて』影書房
- 1999年7月 『新しい普遍性へ：徐京植対話集』影書房
- 1999年8月 『プリーモ・レーヴィへの旅』朝日新聞社 \*2007年12月 韓国版『時代の証言者 プリーモ・レーヴィを求めて』創作と批評社 \*2014年9月 『新版 プリーモ・レーヴィへの旅：アウシュヴィッツ

は終わるのか?』晃洋書房

- 2000年1月 (共著)『断絶の世紀 証言の時代：戦争の記憶をめぐる対話』岩波書店 ※高橋哲哉と共著  
\*2002年5月 韓国版、サムイン
- 2000年6月 (共編著)『石原都知事「三国人」発言の何が問題なのか』影書房 ※内海愛子・高橋哲哉と共編
- 2001年1月 『過ぎ去らない人々：難民の世紀の墓碑銘』影書房 \*2007年9月 韓国版、トルペゲ
- 2001年7月 『青春の死神：記憶のなかの20世紀絵画』毎日新聞社 \*2002年7月 韓国版、創作と批評社
- 2002年3月 『半難民の位置から：戦後責任論争と在日朝鮮人』影書房 \*2006年4月 韓国版『難民と国民  
のあいだ：在日朝鮮人徐京植の思惟と省察』トルペゲ
- 2003年9月 『秤にかけてはならない：日朝問題を考える座標軸』影書房
- 2005年2月 (共著)『教養の再生のために：危機の時代の想像力』影書房 ※加藤周一、ノーマ・フィールド  
と共著 \*2007年8月 韓国版『教養、すべての始まり：この時代に人文教養はなぜ必要なのか?』ノマド  
ブックス
- 2005年7月 『ディアスポラ紀行：追放された者のまなざし』岩波書店(岩波新書) \*2006年1月 韓国版、  
トルペゲ/2023年9月 改訂版、トルペゲ
- 2007年10月 『夜の時代に語るべきこと：ソウル発「深夜通信」』毎日新聞社 \*2007年9月 韓国版『時代を  
渡る方法：徐京植の深夜通信』ハンギョレ出版
- 2007年12月 ◆(共著)『出会い：徐京植・金相奉の対談』トルペゲ ※金相奉と共著
- 2008年4月 (共著)『ソウルーベルリン玉突き書簡：境界線上の対話』岩波書店 ※多和田葉子と共著 \*2010  
年2月 韓国版『境界で踊る：ソウルーベルリン、言語という家を壊して去った放浪者たち』創作と批評社
- 2009年1月 ◆『苦痛と記憶の連帯は可能か?：国民、国家、故郷、死、希望、芸術に対する徐京植の言葉』チ  
ョルスとヨンヒ
- 2009年8月 ◆(共著)『後退する民主主義：30歳、社会科学に会う』チョルスとヨンヒ ※金相奉他と共著
- 2010年3月 『汝の目を信じよ!：統一ドイツ美術紀行』みすず書房 \*2009年5月 韓国版『苦悩の遠近法：  
徐京植の西洋近代美術紀行』トルペゲ
- 2010年4月 『植民地主義の暴力：「ことばの檻」から(徐京植評論集)』高文研 \*2011年3月 韓国版『言  
語の監獄で：ある在日朝鮮人の肖像』トルペゲ
- 2012年1月 『在日朝鮮人ってどんなひと?〈中学生の質問箱〉』平凡社 \*2012年8月 韓国版『歴史の証人  
在日朝鮮人：韓日の若い世代のための徐京植の正しい歴史講義』バンビ
- 2012年3月 『フクシマを歩いて：ディアスポラの眼から』毎日新聞社 \*2012年3月 韓国版『ディアスポ  
ラの眼：徐京植エッセイ』ハンギョレ出版
- 2012年7月 『私の西洋音楽巡礼』みすず書房 \*2011年11月 韓国版、創作と批評社
- 2013年5月 ◆(共著)『境界で出会う：ディアスポラとの対話』ヒョンアムサ ※キム・ヨング他と共著
- 2014年2月 『フクシマ以後の思想をもとめて：日韓の原発・基地・歴史を歩く』平凡社 ※高橋哲哉・韓洪九  
と共著 \*2013年3月 韓国版『フクシマ以後の生：歴史、哲学、芸術で3・11以後を省察する』バンビ
- 2014年5月 『詩の力：「東アジア」近代史の中で(徐京植評論集Ⅱ)』高文研 \*2015年7月 韓国版『詩の  
力：絶望の時代、詩はいかにして人を救うのか』ヒョンアムサ
- 2015年8月 (共編著)『奪われた野にも春は来るか：鄭周河写真展の記録』高文研 ※高橋哲哉と共編著
- 2015年10月 『越境画廊：私の朝鮮美術巡礼』論創社 \*2014年11月 韓国版『私の朝鮮美術巡礼』バンビ
- 2016年3月 ◆(共著)『再び福島と向き合うということ：福島と植民地主義、福島と連帯、福島と芸術』バン  
ビ ※鄭周河・高橋哲哉と共著
- 2016年4月 『抵抗する知性のための19講：私を支えた古典』晃洋書房 \*2015年8月 韓国版『私の書斎の  
中の古典：私に耐える力をくれた本たち』木の鉛筆/2022年6月 ナムヨンピル

- 2016年11月 ◆ (共著)『自由の人文学』ウィズダムハウス ※コン・ジュンゴン他と共著
- 2017年11月 『日本リベラル派の頹落〈徐京植評論集Ⅲ〉』高文研 \*2017年3月 韓国版『再び、日本を考える：頹落した反動期の思想的風景』木の鉛筆
- 2018年9月 (共著)『責任について：日本を問う20年の対話』高文研 ※高橋哲哉と共著 \*2019年8月 韓国版『責任について：現代日本の本性を問う20年の対話』トルペゲ
- 2020年5月 『メドゥーサの首：私のイタリア人文紀行』論創社 \*2018年1月 韓国版『私のイタリア人文紀行』バンビ
- 2021年2月 『ウーズ河畔まで：私のイギリス人文紀行』論創社 \*2019年8月 韓国版『私のイギリス人文紀行』バンビ
- 2022年2月 ◆ (共著)『徐京植 再読1』聯立書架 ※権晟右、コン・ヨンミン他と共著
- 2022年3月 (共著)『徐京植 回想と対話』高文研 ※早尾貴紀他による編 \*2023年5月 韓国版『徐京植 再読2：回想と対話／最終講義』聯立書架
- 2022年5月 ◆『私の日本美術巡礼1：日本近代美術の異端者たち』聯立書架
- 2024年1月 ◆『私のアメリカ人文紀行』バンビ

\* 雑誌掲載論文や対談記事など、より詳しくは、「徐京植著作目録」(『人文自然科学論集』第150号、東京経済大学、2021年2月)を御参照ください。東京経済大学の学術リポジトリを通じて公開されており、インターネット上で「徐京植著作目録」で検索すれば、閲覧・ダウンロードが可能です。

- 【主要出演映像作品】** \*日本で放送された主要な作品に限った(そのほとんどは鎌倉英也氏がディレクター)。
- 2000年9月4~5日 《ETV2000》破滅の20世紀：スベトラーナ・アレクシエービッチと徐京植 前編・後編 (ETV、45分・2回)
- 2002年8月11日 《世界・わが心の旅》イタリア 過ぎ去らない証人 (BS1、45分)
- 2002年9月29日 《ハイビジョンスペシャル》プリーモ・レーヴィへの旅 (BSハイビジョン、90分)
- 2003年2月5~6日 《ETV2003》アウシュヴィッツ証言者はなぜ自殺したか：作家プリーモ・レーヴィへの旅 前編・後編 (ETV、45分・2回) ※ギャラクシー賞テレビ部門2003年グランプリ
- 2003年9月6日 《ハイビジョンスペシャル》パレスチナ 響き合う声：E. W. サイドの提言から (BSハイビジョン、90分)
- 2008年4月6日 《こころの時代》離散者として生きる 作家 徐京植 (ETV、60分) \*2024年1月14日、「こころの時代アーカイブ 追悼 徐京植」と冠して再放送
- 2011年8月14日 《こころの時代》シリーズ 私にとっての3・11 フクシマを歩いて 作家 徐京植 (ETV、60分)
- 2012年12月23日 《こころの時代》小さき者に導かれ 牧師 東海林勤 × 徐京植 (ETV、60分)
- 2014年12月7日 《こころの時代》ガザに「根」をはる パレスチナ人弁護士 ラジ・スラーニ × 徐京植 (ETV、60分) \*2023年11月5日、「アーカイブ・シリーズ ガザに暮らして (1)」を冠して再放送
- 2015年8月30日 《こころの時代》シリーズ 私の戦後70年 害(そこな)われし人々のなかに：沖縄でコルヴィッツと出会う 佐喜眞美術館館長 佐喜眞道夫 × 徐京植 (ETV、60分)
- 2017年4月9日 《こころの時代》「小さき人々」の声を求めて 作家 スベトラーナ・アレクシエービッチ × 徐京植 (ETV、60分)
- 2017年12月3日 《こころの時代》紛争の地から声を届けて 「ハーレツ」新聞記者 アミラ・ハス × 徐京植 (ETV、60分) \*2023年11月12日、「アーカイブ・シリーズ ガザに暮らして (2)」を冠して再放送
- 2023年11月5・12日 《こころの時代》アーカイブ・シリーズ ガザに暮らして (1) (2) (ETV、各60分) \*冒頭の解説を担当(2023年10月24日)、本作が最後の出演となる

# 徐京植さんとその時代 ― 批評家として、活動家として、教育者として

早尾貴紀

## はじめに

本稿は、前頁までに年譜・目録の形でご紹介した徐京植さんの言論活動をよりよく理解していただくため、その長きにわたる広範な言論活動の全体を3期に区分して、一定の見取図を与える試みである。ただし、私自身が1990年代の学生時代からの読者として読んできたことと、また90年代末に徐さんと個人的な知己を得てから直接見聞きしてきたこと、その二つの制約の範囲で、できうるかぎりの記述であるという点をあらかじめお断りしておきたい。

## 1 第一期＝救援活動の時代

一人の作家としての徐京植さんの言論活動に、時代区分を入れることは厳密な意味では不可能だろうし、徐さん本人からは時期で区分されることに違和感・異論もあろうと想像するが、しかし徐さんの言論活動がつねに情勢の変動のなかで社会に向けて発信されたものであることに鑑みると、徐さん個人の持っていた唯一無二の役割と、その言論活動の意義の大きさを理解するためには、一定の時代区分を入れて社会情勢に照らしてみることは、有益であろう。

徐京植さんの言論活動の第一期は、徐さんのお兄さん二人、徐勝さんと徐俊植さんが韓国留学中に政治犯として逮捕された1971年に始まり、二人が釈放される1990年までと見ることができる。この1990年の前後というのは、もちろん韓国においては軍事独裁体制が終わり民主化していった時期であり、世界的に見れば冷戦体制に形式的に終止符が打たれた時期であり、日本社会では直接的な戦争責任者である昭和天皇が死去し「昭和」が終わった時期であった。

この70年代と80年代を通しての徐さんの言論活動は、お兄さん二人の救援運動のなかで、またそのために支援に集まった日本のリベラル左派の知識人らとの交流のなかでなされていった。たんに韓国の軍事独裁の問題ということだけでなく、日本も冷戦構図のもとで米国・資本主義陣営の一端を担い韓国の軍事独裁と共犯関係にあったし、また日本による朝鮮半島の植民地支配が未精算であったことも韓国の軍事独裁に関係していた。他方で、冷戦構図のもとで、共産党や社会党などに属していたりそれらを支持していたりする左派知識人がまだ一定の存在感を持っていた時代でもあった。日本のなかには、日本社会そのものの民主化を追求すると同時に、韓国の軍事独裁に、つまり徐兄弟の投獄に責任を感じ救援運動に関わる知識人がいた。日高六郎、安江良介、和田春樹、藤田省三らなどがその代表格であろう。徐さんは、在日朝鮮人政治犯の弟という当事者の立場で発言するとともに、こうしたリベラル左派の知識人との対話を通して日本社会に問題提起をしていった。その時期の著作は、『長くきびしい道なり ― 徐兄弟・獄中の生』(1988年)と『皇民化政策から指紋押捺まで ― 在日朝鮮人の「昭和史」』(1989年)に代表されるだろう。

## 2 第二期＝歴史認識論争の時代

徐さんの言論活動の第二期は、お兄さん二人が釈放され、冷戦が終わり、「平成」が始まった1990年頃から東京経済大学の専任教員として就職されるまでの2000年頃までと見ることができる。一九九一年から非常勤講師をいくつかの大学で始められているが、やはり常勤の専任教員となるかどうかで教育者としての役割に大きな違いがあること、その前後で徐さんの批評の言葉の質にある変化も認められること、また日本社会も1990年代に「ポスト冷戦」と「ポスト昭和」と「戦後50年」とを迎えて大きく変動していた時期であったことも踏まえて、ここを第二期と区分することとしたい。

90年代は、戦争の記憶と歴史認識をめぐる論争の時代であった。冷戦の終わりと東アジアの軍事独裁体制の終わりは、それまでの大きなイデオロギー対立のもとで封じられていた植民地支配と戦争の記憶を解き放ち始めたのに対して、戦後50年の区切りは歴史認識をめぐる反動的な運動を加速させた。具体的には、91年に韓国で最初の元「慰安婦」のカミングアウトがあり、ここからアジア全域で日本軍「慰安婦」問題が争点化していった。この問題は、民族・性・階級が複合的に関わる植民地主義と戦時性暴力の典型的な事例でもあり、また記憶や証言の（不）可能性やオーラルヒストリーも含む歴史認識と歴史記述の課題を浮き彫りにした。他方で、冷戦が米国・資本主義の勝利というタテマエで終わったために党派的な左派論客は退潮してしまったこと、直接的な戦争責任者である昭和天皇が死去して「平和主義」的な平成天皇が即位したことで左派論客が天皇制批判を弱めてしまったこと、戦後50年の区切りで「もはや戦後ではない」「未来志向」という風潮が強まり、戦争の記憶を忘却する動きが強まったばかりか、日本による対アジアの戦争や植民地支配をアジアの解放や近代化に資するものだったとして正当化する議論が横行したこと（「新しい歴史教科書をつくる会」に代表される）、などが反動の兆候として顕著になった。

こうした情勢の変化のなかで、日本人の左派リベラルの論壇が弱体化していき、逆に在日朝鮮人の知識人としてぶれることなく日本の植民地主義を批判し戦後民主主義の可能性を追求した徐京植さんの発言はますます重みを増していった。私自身も90年代に大学生としてこうした歴史認識論争を目の当たりにしており、そうしたなかで徐さんの鋭い発言に接し、そして教えられていった世代である。なお私は、東北大学の学生時代に宮城県在住の在日朝鮮人の元「慰安婦」宋神道（ソン・シンド）さんの裁判支援に長く関わり（92年カミングアウト、93年提訴）、そうしたなかで戦争・植民地支配・在日朝鮮人の歴史やポストコロニアリズムに関心を持つようになり、徐さんの発言を追いかけるようになった。

宋神道さんの裁判支援の傍らで、私自身も「慰安婦」問題や歴史認識論争に関して発言や執筆をするようになった大学院生の頃に、高橋哲哉さんに声をかけていただき、高橋さんと徐さんとの連続対談「断絶の世紀 証言の時代」（98年から99年にかけて岩波書店で実施し『世界』に連載、同題で2000年に単行本化）に若手の聞き手として同席させていただくことになり、東北地方に住まいながら幸運にも徐さんと直接の面識を得ることとなった。私以外はみな都内在住のなかで一人遠方から駆けつける私を、帰りの時間から交通費のことまで徐さんはいつも気遣ってくださったのがありがたかった。

この90年代後半の時期の徐さんは、「慰安婦」の存在を認めないあるいは「売春婦」と蔑む右派・保守派の歴史否定主義者たちと闘いながら、同時に左派・リベラル派の「頹落」とも次々闘わなければならない、ひじょうに苦しい時期でもあった。和田春樹氏が1995年に発足した「アジア女性基金」という民間募金によって元「慰安婦」に見舞金を支払う運動の旗振りをしたことは、国家責任・国家賠償を否定することになった（徐さんはその後、2015年の「慰安婦問題に関する日韓最終合意」で再び民間基金による解決が謳われた際に、和田氏と何度か公開書簡を交わすこととなったが、完全に平行線であった）。1999年には、花崎皋平氏が月刊誌『みすず』41巻5～6号（1999年5～6月）に出した「脱植民地化と共生の課題」において、徐さんの原則的な批評を「糾弾モード」で受け入れられないと批判したのに対して、徐さんはすぐさま同誌に「あなたはどの場所に座っているのか？」（『半難民の位置から』に収録）を書き反論を試み、戦争責任や歴史認識の問題をコミュニケーション・モードの問題に矮小化する過ちを指摘したが、やはり平行線に終わってしまった。

その少し前の1997年には、倫理学者の川本隆史さんがやはり『みすず』39巻9号（1997年9月）掲載の「自由主義者の試金石、再び」で、彼の師である鶴見俊輔氏がアジア女性基金（民間募金）を支持する無原則さおよび「慰安婦」に対する兵士の「愛」を語る一方的歪みを批判したが、即座に鶴見の盟友でもある藤田省三氏が同誌上で鶴見を支持し、川本さんに対し感情露わに「激怒」を示したことがあった。藤田氏は川本さんにとっても徐さんにとっても恩師であり、また鶴見俊輔と並んで戦後民主主義を代表する思想家である。当時東北大学で教員をされていた川本さんとは私は大学院生として親交があったので、その後に徐さんが仙台に来られた機会に私も入れて3人で会合を持ったが、その際、徐さんの「川本さん、反論しないのですか？」という問いかけに、川

本さんが腕を組んだまま「うーん…」と唸ったきり言葉を発することができなかつたことを鮮明に覚えている。

和田春樹、鶴見俊輔、藤田省三、花崎皋平といった戦後民主主義を代表するようなリベラル派の論客たちが90年代を通して次々と「頹落」していったことについては、日本の戦後思想に深刻な限界があると言わざるをえず、在日朝鮮人の徐さんは期せずしてそのことを炙り出す存在であったように思う。なおこの時期の徐さんの批評を代表する書籍は、『分断を生きる ― 在日を超えて』（1997年）と『半難民の位置から ― 戦後責任論争と在日朝鮮人』（2002年）の2冊だろう。

### 3 「普遍性」へのまなざし

徐京植さんの第三期に入る前に、徐さんの批評の特徴をもう一点加えておきたい。それは私が徐さんの批評に惹かれた点でもあるのだが、ヨーロッパにおけるユダヤ人迫害、そしてその煽りを受けたパレスチナ難民問題やパレスチナ解放闘争への眼差しである。

私自身、大学生から大学院生にかけて、ヨーロッパ哲学を研究し、そのなかでもとくにハンナ・アーレントやマルティン・ブーバー、ジャック・デリダといったユダヤ系の哲学者に関心を持ちつつ、ユダヤ人の特異性と哲学の普遍性とが織りなす緊張関係のことを考えていた。さらにはそうしたユダヤ系哲学者らが、ユダヤ人国家建設運動や戦後に建国されたイスラエルに、さらにその結果として生じたパレスチナ難民に、どのような距離感と姿勢を持つのかを探っていた。むしろそのことを見ないでは、哲学に「普遍」を語る資格などないと考えていた。

そうした時期に読んだのが、徐さんの『私の西洋美術巡礼』（1991年）であった。それは、東アジアの植民地主義と軍事独裁の「特殊」な問題が、さらにそのなかでも「小さな」在日朝鮮人の存在が、しかし世界の〈普遍〉の問題に通じていること、近代資本主義世界の間疎外や、国家と民族と個人の矛盾、マジョリティとマイノリティの緊張関係、権力と暴力の暗部といった、東洋でも西洋でも共通する人間性をめぐる問いであること、そしてそうした人間性を表現する絵画・芸術に徐さんが出会い、救援運動時代の閉塞や絶望から徐さんがかろうじて救われたこと、などが書かれたエッセイであった。

また、ホロコーストのサバイバーでありそのことの意義を考察し続けながら最後に自殺したイタリアの作家プリーモ・レーヴィについて、丁寧に丁寧にその足跡を辿りながら自身の経験を重ね、そして日本の戦争の記憶・証言の問題に示唆を与える『プリーモ・レーヴィへの旅』（1999年）は、衝撃的であった。90年代の歴史認識論争の渦中に刊行された数多くの書物のなかで、静かな声で響くこの一冊は長く読み継がれるべき名著であると思う。

さらに、フランツ・ファノンや白樂晴（ペク・ナクチョン）など第三世界の民族抵抗運動の思想家や作家の作品読解を通して、植民地主義やアイデンティティについて論じた『「民族」を読む ― 20世紀のアポリア』（1994年）、そのなかでもパレスチナ人作家ガッサーン・カナファーニーについて論じた章「土の記憶」や、藤田省三、日高六郎、岡部伊都子、松井やより、鶴飼哲など各氏との対談をまとめた『新しい普遍性へ ― 徐京植対話集』（1999年）、そのなかでもパレスチナ人映画監督ミシェル・クレイフィ氏との対談「普遍主義というひき臼にひかれて」は、ハッと気づかせられたり深く頷いたりしながら繰り返し読んだ。

徐さんは、パレスチナ問題に対して共感を寄せつつ、それが東アジアの（ポスト）植民地主義に共通していたり関係していたりする部分を見出し、そして欧米近代の普遍主義ではない、帝国に抑圧された各地のマイノリティ同士が連帯できるような別様の「新しい普遍性」をパレスチナ人の経験とともに模索していた。単行本には収録されていないが、『現代思想』誌上でなされたパレスチナ／イスラエル研究者の臼杵陽氏と徐さんとの対談「分断と離散を超えて」（『現代思想』24巻9号、特集：想像の共同体、1996年8月）もまた、私には学ぶところが大きかった。

そうしたこともあり、98年に徐さんと面識を得てからは、私は徐さんを仙台に招いて対話集会を重ね、2000年に「断絶を見据えて ― 在日朝鮮人と日本人」、02年に「朝鮮とパレスチナ ― あるいは日本とイスラエル」を開催したが、事前学習として最初のときはブックレット『皇民化政策から指紋押捺まで』を、二回めのときはク

レイフィ氏との対談および臼杵氏との対談を、集会参加者にそれぞれ読んで臨んでもらった。この二度の対話集会は、徐さんが多くの質問の一つ一つに丁寧に応じてくださったことで、ひじょうに充実したものとなり、より広く読んでもらうべくすべてを文字起こしして冊子化した。そしてこの二つの冊子を両方も、徐さんの書籍『秤にかけてはならない——日朝問題を考える座標軸』（2003年）に収録していただくこととなった。単独の講演や知識人との対談ではなく、市民集会の記録が徐さんの著書に収録されるのは珍しいことだったが、私にとっても貴重な一冊である。

パレスチナ関係のことで追記すべきこととして、私が2009年に日本に招聘したガザ地区研究者でホロコースト・サバイバーであるサラ・ロイさんと、徐さんに対談していただいたことがある（「(新しい普遍性)を求めて——ポストホロコースト世代とポストコロニアル世代の対話」として、サラ・ロイ『ホロコーストからガザへ』青土社、2009年に収録）。また、ガザ地区の人権活動家・弁護士のラジ・スラーニ氏や、イスラエルのユダヤ人ジャーナリストのアミラ・ハス氏らとも徐さんは対談している。

#### 4 第三期＝教育者・文化運動の時代

徐さんの言論活動の第三期は、2000年の東京経済大学での常勤教員としての就職以降と見ることができる。徐さんが大学で常勤教員をするということで、さまざまな影響を社会に、とくに若い世代に与えることとなった。第一には、「教養」教育として、戦争や差別、人権やマイノリティといったことを、日本社会の中間層をなしていく学生たちに伝えていった。第二に、「21世紀教養プログラム」やゼミを通じて、とくに「芸術」を媒介して人間や社会を考察し表現する学生たちに寄り添い、育てていった。絵画だけでなく、写真、映画、音楽、演劇など、さまざまな芸術表現による卒業論文（卒業制作）を仕上げた卒業生たちがいたが、多くが徐さんのところでなければここまで自由にはできなかったであろうし、また社会的マイノリティを自認するさまざまな学生たちが徐さんのゼミに集まっていた。徐さんが自らを「学生らのセーフティネット」と呼んでいたことが思い出されるが、最終講義の際には多くの元ゼミ生が集まり、徐さんがいかに慕われていたかを示していた。第三に、徐さんのもとに毎年のように在日朝鮮人の学生が入学してくるようになり、徐さんの助言のもとで在日朝鮮人のアイデンティティや歴史や社会的課題に向き合い卒業論文を書いていった。

この時期の教育者としての徐さんの活動を反映している書籍は、『教養の再生のために——危機の時代の想像力』（2005年）や『在日朝鮮人ってどんなひと？』（2012年）だろう。前者は東京経済大学で徐さんが中心となり「21世紀教養プログラム」を発足させた際の徐さんの講義に、加藤周一氏とノーマ・フィールド氏による記念講演を合わせて書籍化したものだ。また後者は、中高生から大学の新入生あたりを想定読者として連続講義をまとめた、在日朝鮮人に関する総合的な入門書である。なお、この時期の書き物について、1990年代の徐さんの鋭く厳しい論調を知る人たちから、「丸くなった、甘くなった」といった批判を聞くことがあるが、それは徐さんの半面しか見ていないことからくる誤解のように思う。徐さんは教育者として、いかに日本社会の中間層をなすノンポリな若者たちに届く言葉を紡ぐかに腐心していた。私は2006年から徐さんが2年間サバティカル（研究休暇）で韓国に行くあいだの留守番として、徐さんの講義を非常勤講師として代行したが、その際に徐さんから講義の心得として、上記の腐心を伝えられた。「教室は独りよがり先端の研究成果を披露する場所ではない。目の前の学生にいかに言葉を届けるかなのだ」ということを私に言い置いていったのを覚えている。多様な学生を育てるという経験の積み重ねが、自ずと徐さんの語りに変化を与えていったのは、当然のことだと思う。

加えてこの時期の徐さんの言論活動としては、『季刊 前夜』（全12号、2004～07年）などの文化運動が挙げられる。90年代までは「孤高の人」という印象が強いが、2000年代は教育者の顔に加えて、多くのアーティストや研究者や活動家をつなぎ文化的発信にも力を入れていた。04年に東京経済大学で開催した展示とシンポジウム「ディアスポラ・アートの現在——コリアン・ディアスポラを中心に」や、05年に『前夜』が行なったドキュメンタリー映画『ルート181 パレスチナ～イスラエル 旅の断章』（ミシェル・クレイフィ、エイアル・シヴァン監

督)の上映運動といくつかの関連イベント、12年に東京経済大学で開催した韓国の写真家、鄭周河氏の写真展と関連シンポジウム「フクシマの問いにどう応えるか——東アジア現代史のなかで」などが挙げられる。徐さんのいろいろな意味での越境的なポジションが成し得た稀有な組織力と発信力の成果であったと思う。なお、これらの活動に関連する書籍としては、『季刊前夜 別冊 ルート181』(2005年)、『ディアスポラ紀行——追放された者のまなざし』(2005年)、『奪われた野にも春は来るか——鄭周河写真展の記録』(高橋哲哉と共編、2015年)であろう。

その鄭周河写真展と関連シンポジウムとは、2011年3月11日から始まった東日本大震災、なかでも東京電力福島第一原子力発電所の甚大なメルトダウン事故を背景に開催されたものであるが、この大事故は徐さんもまた深刻なものを受け止めた。とはいえ、それはたんに未曾有の大災害としてではなく、戦後日本国家の核エネルギー政策の破綻、および、東アジア冷戦体制下で隠された軍事主義と東北地方にリスクを押しつけた国内植民地主義とを暴露する出来事だったからであり、そこで覚醒した日本社会が「復興」ではなく「更生」することを徐さんは願っていた(が、そうはならなかった)。と、同時に、私自身が当時被災地宮城県に在住だったこと、そしてその翌月4月に東京経済大学に着任予定だったことから、被災避難時には徐さんには多大な心配をかけ、かつ物心ともに厚く支援をしていただいた。私の着任後も、何かと気遣ってくださり、また前記のように、原発事故関連のイベントを開催しては常に私を誘ってくださった。なかでも、2012年に韓国の陝川(広島で被爆して帰国した韓国人が多く「韓国のヒロシマ」と呼ばれる)で開催された「非核・平和大会」にも誘ってくださったのは、私が自分の被災経験を「世界」につなげて考え発言する貴重な機会であった。

2012年の鄭周河写真展は、さらに13年から14年にかけて福島県南相馬市や埼玉県の原爆の凶丸木美術館、沖縄県の佐喜真美術館など6箇所を巡回し、その都度トーク・セッションやシンポジウムが開催された。そのうちの二箇所でも私も参加させていただき司会や発言もしたが、その全体を記録として書籍化したものが先にも触れた『奪われた野にも春は来るか』であった。また、同時期に徐さんは、自身の単著単行本として『フクシマを歩いて——ディアスポラの眼から』(2012年)をまとめ、さらに、福島県出身でもある高橋哲哉さんと、韓国の歴史家の韓洪九さんとの連続鼎談を『フクシマ以後の思想をもとめて——日韓の原発・基地・歴史を歩く』(2014年)として刊行している。徐さんにとって原発事故がいかに大きな意味をもったのかをこの3冊が物語っている。

## おわりに

振り返ってみて、戦後民主主義と東アジア冷戦とが緊張関係をもっていた70年代・80年代、ポスト冷戦とポスト「昭和」が重なる時期に歴史認識論争が激しかった90年代、南北朝鮮や中国との関係を悪化させた一方で(9・11)以降の対テロ戦争で軍事緊張が強かった2000年代、原発事故以降に内向きな復興ナショナリズムが高まった2010年代と、徐さんは稀有な時代の目撃者であるとともに、どの時代においても体制やマジョリティを冷徹に見通す「マイノリティの目」で発信を重ねる言論人であり続けた。そして、在日朝鮮人としての民族アイデンティティを強く肯定する「民族主義者」であり、西洋文化(絵画・音楽・文学)の伝統に通暁しそこから最良のものを汲み取る人文主義者であり、パレスチナをはじめとする第三世界の虐げられた人びととの連帯を模索する「新しい普遍主義者」であり、そして日本の大学や社会で学生や同僚や市民をつねに啓発してくれる教育者であった。一人の人間が背負うにはあまりに重い荷物を、徐さんは負っていたように今更ながら思う。

※本稿は、早尾貴紀・李杏理・戸邊秀明(編)『徐京植 回想と対話』(高文研、2022年)の序文として書かれたものを、「徐京植さんを偲ぶ会」のために一部改稿して掲載するものである。

## 京植を悼む《ビデオメッセージ》

徐勝 [ソ スン]

昨年、京植 [キョンシク] の突然の訃報に接し、いちばん年下の弟が先に逝ったことに戸惑い、孤絶感に襲われました。

京植は私たちが囚われて以来、兄の釈放のために身を投げうち、出獄後に糸の切れた凧のようにフワフワと飛び回る私を一面腹立たしく、疎ましく思いながらも、生活を支え、助言を惜しまず、他方では全てのものに絶望し疑いながらも、自らの存在を意味付けようとしてきました。

京植は末弟でしたが、「聞く耳」を持つ慎重な知恵者として、ややもすればぶつかり合う兄弟の中での「取り持ち役」「まとめ役」として掛け替えのない存在でした。いつか私に『家族の群像をリアルに小説にしたい』と、皮肉な笑いを浮かべて言ったことがあります。平素、ピカレスク小説や山口瞳などを好んだ京植が、膨大な情報を蓄積して肺腑を抉る言葉で小説『家族史』を描いていたならと残念です。

京植は京都工芸繊維大学（旧京都高等蚕糸専門学校：通称、コウサン）の裏門、木辻の三軒長屋で生まれました。一階の奥でオモニが木の盥で京植に行水を使わせていた様子が今も髻髻とします。オモニは丸々としてパッチリと目の大きな末っ子をととても可愛がっていました。

我が家は1956年ごろ、市内の円町の近くの平町に移り、借家暮らしから工場・倉庫がついた120坪ほどの大きな家に引越して、京植は洛陽幼稚園から朱雀第4小学校に進みました。京植は兄弟の中ではいちばん大人しくて温和な性格の子供でした。朝鮮人はよく『食べただけが儲けや』と、大いに飲み食いしたものです。我が家の食卓も食道楽のアボジ（父親）とオモニの創意工夫で豪勢なものでした。焼き肉、すき焼き、鯉の刺身、ホルモン焼き、散らしずしや鯖寿司などは定番料理で、つつまじやかな日本の家庭の食卓と比べると破格のメニューでした。子どもの好きなコロケや串カツなどが出ると、食い意地が張っていた次男坊の私の目から見ると京植はいつも控えめで、『兄ちゃん食べえな』と自分の分をそっと差し出したりしました。

アボジは高等小学校卒、オモニは無学。私の家は朝鮮ではどこにでも転がっている怪しげな両班の族譜 [チョクボ] すらない忠清南道 [チュンチョンナムド] 出身の田舎者でしたが、オモニは人々に対する気遣いの中にもプライドは高く、いつも『世間さま（日本社会）に後ろ指をさされるようなことをしたらあかん』と言い、両親の口癖は『日本人には負けんように』でした。朝鮮人は学歴志向で、試験でいい点数を取れば褒められたものでした。小学校での京植は、腕っぷしの強かった俊植 [ジュンシク] や、現実離れした夢想家の私と比べて、品行方正でよくできる子でした。当時、5人しか卒のなかった京都教育大学附属中学の編入試験を受けたのは、学歴偏重が激しかった私の勧めによるものでした。「ええとこのぼんぼんやお嬢ちゃん」が通う付属は、家からは少し遠かったのですが、文芸部やバスケット同好会で自由な雰囲気を楽しんでいたようでした。

大学進学にどれほど身を入れていたのか知りませんが、高校3年になり、工場の屋根裏にしつらえた京植の勉強部屋を覗くと、ステッキを手にシルクハットと燕尾服姿の今陽子の大きなポスターが貼ってあり、ピンキーとキラーズの「恋の季節」が流れたりしていました。京植は学友と文学談義をたたかわせたり、詩を書いたりして、シャイなチョット早熟 [ませ] た高校生でした。ちょうど東大闘争の年に当たり、東大の入試はなくなり、受験生が押し寄せた京都大学には落ちて、早稲田の仏文に行くことになりました。

大学に入ってから韓国学生同盟の活動などをしていたみたいでしたが、71年に俊植と私が逮捕され、フランス文学どころか彼の大学生活と人生は滅茶滅茶になってしまいました。もともと繊細で体が弱く、甲状腺ホルモンの異常などがあったようですが、先の見えない釈放運動に絡み取られて、精神的・身体的健康は悪化し、生命の危機にも直面したようです。思春期を経てこの頃から、全身からメランコリックな淀んだ空気をかもし出すようになったのです。70年代後半から、当てのない兄たちの釈放の手がかりを求めて欧米を放浪するようになり、美術館巡りにわずかな救いを求めていたようです。「トリプル・チェックマン」と言われたくらい万事慎重で疑ぐ

り深く、孤独と憂愁に包まれた京植とロスアンジェルスで出会った在日朝鮮人のB子は『京植は20代とは信じられないほど老け込んで灰色だった』と回想しています。その深い霧の中から、根拠にされた流浪者が懸命に岩にしがみつこうようなディアスポラへの接近を強めたものと思われます。

私たちの家は在日朝鮮人としての民族意識は比較的明確でした。京植が直面したのは、韓国の最強の暴力装置である情報機関を相手に、二人の兄の名誉ある釈放をいかに勝ち取るのかという至難の闘いでした。そこで幸運だったのは、アメリカのベトナム敗戦の中で韓国の軍事独裁政権が破綻し、「単一民族神話」を脱して、没歴史的国際化・新自由主義へ向かう前のインターナショナルイズムの理想がかろうじて存在し、反戦・平和で、自己批判的で、最も理性的であった時代の日本と日本社会があったことでした。そこで、金大中〔キム デジュン〕、金芝河〔キム ジハ〕の釈放運動に迫るほどの広大な国際的釈放運動を組織したのは京植の才覚であったのですが、釈放にあずかって最も大きな要因は、日本を含めた海外での韓国の軍事独裁政権批判と、それに呼応した韓国の民主化運動であったと言えるでしょう。

俊植は保安監護を含めた最も残忍な獄中生活を避けることなく、拷問に耐えて正面から抵抗し、凄まじい闘争力を発揮しました。京植も命をすり減らしながら苦悩し抵抗したことは、その後の彼の生活からまざまざと読み取れるのですが、私は押し寄せる試練の過酷さにたじろぎ、驚愕して、拷問を耐え抜く勇気もなく、すべての矛盾を自らの消滅によって解消する方途に頭を巡らせました。そのまま尋問官の手に委ねられていたなら、さらなる拷問に翻弄され身も魂も売り渡す卑劣な行為に出ていることは想像に難くないのです。そこに保安司令部の西氷庫〔ソビンゴ〕分室のカマボコ兵舎において監視兵が喫煙のために席を外すという又とない幸運がやってきて、私は『これで全てが終わるんだ』という妙な安堵感の中で自殺を企図したのです。

始末が悪かったのは、その結果、体にまつわり燃え上がる炎の中で受けたショックが私の思考をバラバラにただけでなく、獄中で先輩たちの後にくっついて、政治犯としての尊厳を守り、処遇改善を要求する闘争や、思想転向に抗する程度の判断はついたものの、獄中や、また出所後にも大火傷という免罪符にもたれて、京植や俊植のような身を投げ打った闘いを避け、安易な生活に墮すことを自らに許したことでした。長い間、京植の諫言から目を背け、彼の内面の苦悩を斟酌しようとしなかった私に、2000年代の京植の苛立ちと怒りがあったのです。

その間、在日朝鮮人のアイデンティティをめぐる様々な論議がありましたが、朝鮮人の近代的民族意識は日帝の民族抹殺政策が形成したもので、植民地支配体制に身も魂も売った親日派を除いて、朝鮮人は大なり小なり抗日民族意識を持っていました。私たち兄弟の間で歴史とアイデンティティについて、改まった話はなくとも、暗黙の了解があると安易に考えていた節があり、正面から確認することはなかったのです。我々が釈放されて、京植が自分の分野と仕事を持つようになって、兄弟の間の考え方の齟齬は顕在化していったように思えます。解放後、「在日」朝鮮人社会が形成され、1970年代には、社会主義思想や階級論の衰退、アメリカの世界市場支配の中での国際化、ポスト・モダニズムの流行の中で「アイデンティティ・ポリティクス」が立ち現れ、「在日論」が高唱され、マイノリティー論が語られるようになりました。「祖国志向」対「在日志向」という二項対立の中で「祖国志向」は旧世代の遺物視されるようになりましたが、私は朝鮮人を日帝によって、故郷や祖国、言葉や文化、名前までも奪われた者と規定し、「奪われた民族」を取り戻すことが、とりもなおさず主体性の確立であり、朝鮮の自主・独立であり、南北統一であり、在日朝鮮人の生きる道であると考えました。俊植は命がけで、「全ての面で本国生まれの朝鮮人以上の朝鮮人になりきる」決心をし、社会主義思想と民族性の確立を目指して、血のにじむ努力でその課題をやりぬいたと言えるでしょう。解放後にアメリカ支配の反共・分断体制の中で蘇生した韓国の親日・親米派中心の独裁体制に抗して、民族統一と自主独立を志向する「祖国志向」の在日朝鮮人は、日本への同化を拒否し、より完璧な「民族性」を身に付けようと懸命になりました。

アメリカ社会の多民族共生社会論のコピーである「多文化共生社会論」、「在日論」が流行するようになったのは、帰国運動が一段落して、日本の経済的繁栄と国際化の要求が高まる中で、在日朝鮮人の一部が自らを日本のマイノリティーとして位置づけるようになってからです。それは、ある意味で自然であったともいえるでしょうが、いち早く日本での永住権を放棄し徹底して祖国の土と化すことを覚悟した俊植や、日本に軸足を置きながら

も、日本帝国主義と植民地主義の克服を通じた東アジア民族解放こそが平和・統一の道であると考えた私のような場合と、在日朝鮮人のアイデンティティを重視しながらも、釈放運動を通じて出会った日本や欧米の多くの友人や海外の朝鮮人と協力・連帯し、共に悩み・考えることになった京植の場合とは違いがあったと言えるでしょう。京植はそれらの人々とともに「苦痛の連帯」を築こうとする中で、美術や音楽という普遍的価値に接近して共鳴することになったと考えられます。

京植の遺稿となった『私のアメリカ人文紀行』（韓国語、2024年1月、반비）には次のような件〔くだり〕があります。

1980年代後半、民主化が進んで、私の二人の兄を含む政治犯が釈放された。あちこちで感激の抱擁があった。その瞬間を忘れられないが、その感激の裏には、間もなく失意や幻滅の影が忍び寄っていた。長生きすると、苦々しい現実も見えてくるのだ。……「兄弟」が再会の喜びの抱擁なら、こちら（「愛に満ちた夜の回想」）は、別れを予感させる。人は人をこのように抱きしめることのできる存在である。あの二人の分かち合った温かさが、私の内にまでしみ込んでくるようだ。本当にベン・シャーンならではの表現だ。（p184）

この件を読んで、釈放後に兄弟の温かさを求めながら、失意と幻滅に打ちひしがれ死んでしまった京植を思い、自らの過ちや至らなさを思い知らされたのでした。しかも、この失意と幻滅は単なる「兄弟愛」だけではなく、南北に分断されながらもますます自己疎外を深めている民族の現状や、巨大な資本や国家の論理によって人間が摩耗している世界の現状に起因するところもあるのです。私たちの釈放後にも、より人間的な社会の実現を求めて、人間の解放を求めて果たせなかった京植は、失意や幻滅に沈淪して行ったように思えます。

京植の「ディアスポラ論」は時宜を得て、特に韓国で膾炙されましたが、俊植は強く批判していたようです。私も違和感を感じてきました。ディアスポラは「故郷」から引き剥がされて離散した存在であり、国家や制度社会から弾き出されて、その保護を取り払われた存在として観念されています。だから国境に依拠して、「国益」の名のもとに利己的利益を追求する現代国家の属性から、その保護を取り払われたディアスポラが再生産され、増殖しているわけで、結局、国家や国境の消滅に至らずにはディアスポラの痛みは解消されないといえるでしょう。しかし、ディアスポラは現象的な分析概念であり、その向こうを展望する「社会科学的」説得力を持たないように思われます。それにディアスポラ概念は植民地支配下での流浪民や海外に在住するコリアンには該当するとしても、曲りなりにも「祖国」を持つようになった解放後の民に当てはまる概念とは考えにくいのです。にも拘わらず、韓国で膾炙される理由は「ポストモダニズム」の流行の中で、マジョリティの中のマイノリティーの問題や、移住労働者、多文化家庭の問題など、韓国における既成のアイデンティティですくい取れない者たちに適用しうるからだと思われまふ。

しかし、今回の韓国の総選挙で明らかなように民族や民衆の運命を決する天王山は、先ず何よりも帝国主義と親日親米の独裁政権に抗する、民主化・民族自主・統一運動にあり、言い換えるなら権力奪取の問題にあると思われまふ。ただし、よしんばそこで勝利をしたとしても、その後に坦々とした緑の草原が現れるとは限らず、つかの間の幸福感の後に先の見えない失望と挫折が待ち構えている可能性が高いのです。しかし、そのシジフスのような苦行を続ける他には前に進む道は見いだせないのではないのでしょうか。

私たち兄弟は、年老い病んで間もなくこの世と離別せざるをえないでしょう。それで京植にまた会えることができれば、どれほど素晴らしいことでしょうか。今から6、70年逆戻りして、幼いころの京植に対する心無い仕打ちを謝ることができれば、少しは心休まるのに…… 少なくとも俊植や京植の奮闘に少しでも報いてくれるような歴史の前進を感じられるなら、どれほど心癒されるのでしょうか？

しかし、今は、無数の愛着と絶望、矛盾を抱えて去って逝った京植に対して、アイゴの叫びで答えるしかありません。

（了）

\*〔 〕内は直前の漢字に付されたルビ

## 徐京植先生を慕って《ビデオメッセージ》

崔在嫻

2011年、『越境画廊——私の朝鮮美術巡礼』を皮切りに、徐京植先生の文章をハングルに翻訳している崔在嫻と申します。徐京植先生を追悼する席に呼んでいただき、大変光栄に思います。日本の皆さんが集まる場なので、円滑な進行のために日本語でお話しすることも考えましたが、韓国語／朝鮮語でお話しすることになりました。これはもちろん日本語能力の不足という理由も大きいですが、何より私が徐先生と交わした対話のほとんどが韓国語／朝鮮語だったからでもあります。先生に対する思いを最もよく伝えられる私の母語で話すことをご了承ください。翻訳を担当してくださった李杏理さんにも感謝いたします。

徐京植先生が私たちの側を離れてからもう4ヶ月近くになります。昨年12月19日の午前、電話の向こうから船橋さんの哀しい声を聞き、翌朝急いで茅野へ発ち、ベッドの上で安らかに眠るように横になっている徐京植先生にお目にかかりました。つい3日前に新刊出版と関連した訪韓の日程、ブックトークと記者会見について先生と電話でお話したばかりだったため、信じられませんでした。訃報のお電話をいただく数時間前まで、私は徐先生がEメールで送ってこられた文章『私のアメリカ人文紀行』のエピローグ〔本冊子 pp.3～6「絶筆」〕を翻訳していたため、なおさら信じられなかったのです。あまりにも突然の別れでした。飛行機の切符を買って長野に向かうことに精一杯で、先生をお送りする哀しみに打ちひしがれ、きちんとした御挨拶の言葉さえ準備できなかったのです。この時、韓国からは9名が葬儀に参列しました。大きな喪失感と哀しみを共有しながら、お互いの心を分かち合うことができたため、その後も会い続けて先生の意思を受け継いでいくために、さまざまな企画をしようと尽力しています。すべて徐京植先生が繋いでくれた大切な縁だと思います。できれば今日はその方々を含む韓国の友人たち、『徐京植 回想と対話』で澁谷知美さんが語った韓国の「徐京植スクール」の心と声もこの場を借りてお伝えしたいと思います。

私は葬式を終えて韓国に帰ってくるやいなや、徐京植先生の遺作になってしまった『アメリカ人文紀行』の翻訳原稿の仕上げと校正をしなければなりません。しかし、徐先生の人文紀行がアメリカで終わってしまったという現実を受け入れるのに多くの時間がかかりました。この本に掲載した翻訳後記は、今まで私が書いたどんな文章よりもつらく、哀しみの中で書いた文でした。その文章の中で、私は徐京植先生を記憶し、彼の不在を惜しむ韓国の多くの読者に2023年12月21日、葬儀で船橋裕子さんが弔問客になされた御挨拶も伝えなければならぬと思いました。簡単に要約すると、次のような内容でした。

「彼がもう少し生きていたら、きっと人びとの役に立つようなことをもつとしたと思うと、残念でなりません。一方で、彼は「人間であることの罪」にずっと苦しめられた人でした。毎日がそれとの闘いでした。ようやくその闘いから抜け出せたのかも知れません。死によってその重みを手放したんだと思います。「お疲れ様でした。やっと楽になりましたね。本当にお疲れ様でした。」と言ってあげたいです。皆さんのおかげで、彼は頑張ることができたと思います。」

人間であることの罪——この言葉がもしかすると徐京植という在日朝鮮人の生を象徴しているのではないかという気がしました。徐京植先生がひとつの尺度としたプリーモ・レーヴィも述べたことです。『周期律』でアウシュヴィッツ生還後の日々を語り、レーヴィは「人間であることから感じる罪悪感」について述べました。徐先生の重要な著作『プリーモ・レーヴィへの旅』も、なぜ恥を知らない加害者の恥までも被害者が全部受け止めて苦しまなければならないのか、なぜその不条理な顛倒が起きるのかについて苦悩する文章だったと思います。

葬儀場でこの言葉を聞いて、私は『アメリカ人文紀行』がなぜあれほど長い連載期間を持たなければならず、徐京植先生はなぜ「おわりに」の文章を書くのがそれほどまでに辛いとおっしゃったのか、一足遅れて悟ることができました。『アメリカ人文紀行』は2019年9月に第1回連載が始まりましたが、2020年11月に最終章を残

して休載が決定されました。結局、絶筆となったエピソードは、亡くなる前日になってようやく完成することができました。その間、2022年2月にロシアによるウクライナ侵攻が始まり、2022年7月にはミャンマーの軍部によって民主化運動家4人が電撃処刑をされましたし、特に2023年10月からはガザ地区で恐ろしい殺人が続きました。そのような事態が徐京植先生に及ぼした心理的打撃は私の予想をはるかに超えていました。この時期に徐京植先生は『アメリカ人文紀行』を完成させることはできませんでしたが、その代わり、韓国のハンギョレ新聞のコラムを通して「ますます悪くなる世界」、理想は消え、そこには戦争と苦痛があり、「陳腐化」している、そんな世界に向けた憂慮と警告を休むことなく発しました。私は彼の翻訳者であり編集者であるという自負心と責任感から、徐先生の文章を欠かさず読みました。それでも正直に告白すると、「徐京植先生らしい、徐京植先生だから書ける文章だな」と思い、いつの間にか少しずつ鈍感になっていたようです。あるいは、自分のレベルでは到底たどり着けない「徐京植の感覚」と自らに弁明しながら。

徐京植先生が去った今になって、いつかされた「カナリアの歌」に関する話を思い出し、胸が痛くなりました。カナリアは人より先に一酸化炭素の濃度に反応するため、鉱夫が坑道の中に連れて入っていくそうです。カナリアの最期の歌は先に苦痛を感じながら、死によって危険を知らせる悲鳴でもあります。徐京植先生は、危機に見舞われたとき最も敏感に反応して、警告する役割を付与された在日朝鮮人と、それから自身の文章をカナリアに例えたことがあります。香港、ベラルーシ、ミャンマー、ウクライナ、パレスチナで行われている残酷なことが、時が経つにつれ陳腐に感じられるように、徐京植先生の書き物と心まで私の中で陳腐化されてしまったのか。カナリアの悲鳴を聞き流したのではないだろうか、そんな思いで今も心がずきずき痛みます。

他者の苦痛に対する想像力にひときわ敏感だったディアスポラ知識人の人文紀行は、もともと計画していたドイツ、フランスへとつながらずに終わってしまいました。その最後の道を進みながら、私は旅行と関連して以前徐京植先生が残した文の中で好きないくつかの文章を探して読みました。小説家・多和田葉子さんと交換した書簡集に寄せた文章です。

私は現在も落ち着きなく旅を繰り返していますが、それは日常からの解放ではありません。「居住」を求め続ける放浪のようなものです。年齢とともに旅をするのが負担になってきました。しかし、旅に出られなくなったとしても大きな違いはないでしょう。私にとっては日常の「居住」もまた旅のようなものですから。では、ボン・ボヤージュ（よい旅を）。(『ソウルーベルリン 玉突き書簡 境界線上の対話』岩波書店、2008年、pp.47~48)

徐京植先生はもう側にいませんが、居住も旅行も同じようなものだった彼の人生と旅程が長く記憶されるよう、全うすべき責務が私たちに残されていると思います。

先生がこの世を去り、韓国ではいろいろなイベントが行われ、新聞や雑誌などのメディアだけでなく、個人のSNS、書店のホームページの追悼インターネット空間に読者の書き込みや言葉がぎっしりと埋まりました。私はこれがひとつのアーカイブであると考え大切にしまっておきました。その中から知人たちの言葉をいくつかお伝えします。

訃報の声を聞いた瞬間、呆然とするとともに途方に暮れ、瞬間的なパニック状態に陥った。それは痛切な悲しみよりは茫然自失に近い感情だった。今まで私を支えてきたある堅固な精神、常にインスピレーションと深い余韻を与えた「人間図書館」が一瞬にして世の中から消えた感じだった。(中略) 常に希望と楽観よりは深い悲観と絶望を凝視していた彼の正直な態度から、かえって勇気をもらい希望に向かう灯火を見出す人が多かった。「私は不幸に暮らしているながら、不幸だという話もできなかった人びとの側に立ちたいです。」と言った徐京植先生の態度と視座は少数者という意識すら持つことができなかつた疎外された人の心に切実に迫ってきたのではないか。(文芸評論家 権晟右)

20代のある日、後ろ手を組んで歩く後ろ姿が印刷された表紙を見ながら、大きくて暖かい岩のようだと思う

て徐京植の文章を読み始めた。その後続いた「徐京植読み」が私にはいつも、その後ろに着いていつているという安全な感覚と共に、少し自覚的に奮い立たせる力を与えてくれた。何よりも徐京植の言葉と文章が私にはディアスポラを体感できる最も身近な通路だった。今でも。

著者たちが幽明境を異にしたという知らせを聞いた時、編集者は一斉に悲しみの後に訪れる奇妙な活気を感じる。著者の時間はなによりも、彼ら自身の肉体的な死で終わらないからだ。長い間私たちと共にした徐京植先生に対する追慕の紙面をつくる心もまた、哀しく力強い。徐京植先生が書いた文章によって新しい生を始める誰かの著者であるからだ。(編集者/文芸評論家 パク・ヘジン)

安住しよう、安定しようとする人びとに不安定な感覚を反芻することを使命にした方です。何か忘れたい時、ああもう根付いたんだと、気だるくリラックスした気分酔いしれる時、徐京植先生の言葉と文章を思い出してみることにします……そのように記憶し、哀悼します。(編集者 キム・ヒジン)

そして、徐京植先生に対する恋しさと慕う気持ちを分かち合った席で、徐京植先生の長年の知人である哲学研究者コン・ヨンミンさんが放った言葉が皆の共感を集めました。それは「親切な人、徐京植」という言葉でした。

彼はいつも親切な人たちが連帯できるように橋になることを自任した。「先生は誰が誰と会えばいいのか、誰と会って対話すれば新しい地平を開くことができるのか、その人がどんな本に会えば役に立つのか考えた」

(中略) ある人は徐先生を「正しい」、「当為的正当性」に傾倒して現実を逃したと言い、ある人は運動論理に陥ったまま妥協の代わりに闘争だけを叫ぶ者と言うが、私にとって先生は正しさの代わりに親切を選択した人であり、急進的親切さによって現実の妥協的論理で作られた利益/許し/希望などと「親切」を交換しようとする人たちに対して断固として対抗した方だ。「あまりに正しすぎる徐京植は正しすぎて問題だ」という人に、その正しさの核心には親切があったということを何としても言いたい。どんな人であれモノにされてはいけないという、いわば植民地主義の心性に対する抵抗としての親切。誰かが先生を評する文章で、徐京植は文学的にも政治的にも立派な作文の模範を示したと書いたが、私は先生の親切さ、親切さの思惟、親切の急進性がまさにそのような模範を成就させたということも見逃してはならないと強調したい。(コン・ヨンミン)

徐先生が亡くなった後、初めて先生のいないブックトークが開かれました。権晟右さんが自分の好きな先生の文章を選んで参加者たちと分かち合い肉声で朗読した席が特に記憶に残ります。そこでまだ徐先生の文章を読んだことのない参加者がこんなことを言いました。「今まで私にとって徐京植はいない存在だったが、今日彼の文章を朗読して聞く場を通じて『ある存在』になりました」。

最後に前回の葬儀に出席した9名が連絡し、今も続けているグループチャットの名前を紹介したいと思います。ふたつの名前を一緒に使っています。ひとつは「徐京植スクール」、そしてもうひとつは「徐京植の幽霊たち」です。イ・ジョンチャンさんが雑誌に書いた追悼文の最後の文章、「先生は去られたが『徐京植の幽霊たち』は残存する。まだ終わっていない」から取った言葉で始まりました。「幽霊」はいつか徐京植先生がなされた言及ともつながります。徐京植先生は過去を記憶する「ノスタルジア」をあえて否定せず、権力と不正、無自覚に抵抗する武器にしようと提案しました。そしてある対談で、「私は歴史に、過去にしがみつくと人だということを恥ずかしく思いません。誰かが私に『過去の幽霊、亡霊』が蘇ってきたような感じだと言った時も納得しました」(哲学者キム・サンボンとの対談、『出会い』トルベゲ、2007年)とも語っていました。

幽霊の意味が少し違ってくると思いますが、過去を記憶することで現在と戦っていく力を得て、未来を見通す人物だった徐京植先生を記憶し、彼の意志を知らせる人びととして喜んで「徐京植の幽霊」たちとして生きていきたいです。ありがとうございます。(李杏理訳)

# 追悼メッセージ

## 文章を武器に闘った孤独な反植民地主義の闘士

韓承東

在日同胞作家であり著述家の徐京植先生が18日午後亡くなった。

1951年、京都で在日同胞2世として生まれ、険しい歳月を乗り越えて生き、韓国と日本社会に明確な足跡を残した意味深長で波乱万丈な人生を送った。享年72。

2年前に東京経済大学を定年退職する以前から、足腰の痛みで生活に支障のあった先生は、同日、いつものように長野県茅野市の自宅近くにある温泉に行き、突然倒れ、死亡した。

去る5月には、毎年列席する仁川ディアスポラ映画祭で講演し、9月にもソウルに2週間滞在した。その時、杖をついて慎重に歩かなければならないほど歩行困難だったが、好転しているとのことで、多数と共に食事しながら話を交わすにも特に支障がなかった。新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、数年間韓日間の往来が途絶えた後の再会を大変歓迎した。

不意打ちのような知らせに韓国と日本の読者たちと知人たちがうろたえるなかで互いに連絡を取り合って哀悼した。

悲しい。どうか安らかに永眠されますように。

1990年代初め、本を通して韓国に知られるようになった先生は、「日本より2、3倍程度」になると喜んだ韓国の読者に対する活発な著述と講演等を通して、「ディアスポラ」や「少数者（マイノリティ）」、「境界人」など、韓国社会に馴染みのない言葉を幅広い大衆的反応と共感の中に引き込んだ。そして「外部者」の独特な感受性で絵画（美術）と音楽に対する考えと「他者に対する共感」「他者の苦痛に対する想像力」を次元高く鍛えて拡張し、国家主義と民族主義、日本、在日同胞、本、家族、母語と母国語などに対する既成観念に衝撃を与え、新しい思惟の扉を開けて韓国の読書人界と知識社会に大きな反響を呼び起こした。「カルチャーショック」と言える。

「振り返ってみると、私が滞在した時代の韓国は金泳三、金大中、盧武鉉政権の文民政権時代、長い軍政を克服して、まだまだ問題だらけとは言いながら、希望や活力を感じさせる時代だった。」

去る7月6日、2005年5月から18年間続いた『ハンギョレ新聞』連載の最後のコラム（「真実を語り続けよう——連載を終えるにあたって」[日本語版：<https://japan.hani.co.kr/arti/opinion/47238.html>]）で先生は「私が書いた文が人々に読まれ受け入れられたのもそのような時代の空気のおかげだということを実感している」と話した。

「民主化」に象徴される韓国社会の躍動的な変化が東アジア社会の進歩的転換の起爆剤になるとし、大きな希望をかけていた先生は、その空気が再び変わっている気配を早くから捉え不吉だと述べた。最近「尹錫悦政権の下で、韓国社会は逆回転に入ったようだ」とし、「すべてのものが浅薄になり、卑俗になっていくと感じる」と嘆いた。

そして勝算がほぼなかったにもかかわらずパレスチナでの正義実現のために実践的発言を続けたエドワード・サイードを想起して「私たちも、勝算があろうとなかろうと「真実」を語り続けなければならない」と述べた。

「厳しい時代が刻々と迫っている。だが、勇気を失わず、顔を上げて、「真実」を語り続けよう。サイードだけではない。世界の隅々に、浅薄さや卑俗さと無縁の、真実を語り続ける人々が存在する。その人々こそが私たちの友である。」

先生が早くから考察してきたルーマニア生まれのユダヤ系詩人、パウル・ツェランの「投擲通信」に例えた言葉が思い出される。「（書くこととは）離れ島に漂流した人が空き瓶に手紙を入れて海に流すような、または闇に向かって石を投げるような行為だ。誰かに届くのか、反響があるのかどうかも分からないまま、未知の読者に向

かつて語り続けるのだ」。考えてみれば、先生はその未知の友に向かって、届く確約もない手紙と石を最後の瞬間まで投げ続けた。

ルーマニア生まれのパウル・ツェランは、両親がドイツのナチスの手によって殺され、自身もナチスの絶滅収容所に行き辛うじて生き残ったが、生まれながらの母語であるドイツ語で詩を書いた。

先生がパウル・ツェランに傾倒したのは、彼自身が在日2世として母語である日本語で文を書きながら、自分が克服しようとした植民主義侵略者であり「敵国」である日本の言語で書かざるを得ない境遇が、ツェランのそれと似ていることからくる共感ではないか。

先生が韓国社会に紹介したもう一人のナチス絶滅収容所の生存者でありイタリア・トリノ出身のブリーモ・レーヴィも、不可抗力の国家暴力が引き起こした不条理の犠牲者だったという点で似ていた。そして、彼らは自分たちが経験した極限の不条理と矛盾、実存的危機の真実と教訓を、それを体験できなかった大多数の人々に完全に伝えて共感させることはできないと絶望した。徐京植の人生の片隅を支配した悲観と憂鬱も似たような淵源を持っていたかもしれない。絶滅収容所を生き延びたツェランとレーヴィは、結局自ら人生を終えた。

植民国日本の母語で自分の考えを表現するほかなかったため、自らを「言語の監獄」の囚人と述べた徐京植も「閉ざされた地下室のような息苦しい空気」の日本社会自体を一種の収容所と認識したのではないか。彼が美術、音楽または芸術を穿鑿したのも、それらが外界の空気に触れて呼吸できる「窓」と捉えたためだ。

先生を知ったのは1992年、韓国語の翻訳書でベストセラーになった最初の本『私の西洋美術巡礼』（倉批）を通じてだった。私が2005年に『ハンギョレ』国際部から文化部に辞令を受けて、新しい部署での初任務が多様な本の話盛り込んだタブロイド版セクション紙（『18.0』）を作ることだった。コラムもいくつか載せることにしたが、日本側の筆者としてまさにその『私の西洋美術巡礼』の著者が満場一致で選ばれた。それまで見ず知らずだった先生に、緊張しながら恐る恐る依頼の電話をさしあげた時、電話線に乗って聞こえてきた東京からの声は、意外にも柔らかくて快活だった。以後、最後の文章まで18年間続いた彼の『ハンギョレ』連載コラムと数冊の著作を翻訳する「恩恵」を受けた。

奇しくも10月27日、『ハンギョレ』に掲載された先生の最後の文章も企画「私の初めての本」シリーズの最初の筆者である先生の『私の西洋美術巡礼』に関する話だった。

「ベルギーの古都ブリュージュの美術館で『カンビュセス王の裁き』に出会った時、『ああ、やっぱり…』という考えにとらわれた。その絵はまるで私を待っていたかのようだった。生きたまま皮膚を剥がされている犠牲者の姿に、数カ月前、深い失意の中で死んだ父親の姿を重ねて見たのだ。その3年前には病苦の末、母親が恨を抱いてこの世を去った」。

この時が1983年。「祖国」で新しい出口を見つけたという家族の期待の中で、青い夢を抱いてソウル大学社会科学の修士課程（徐勝）と法学科（徐俊植）に通っていた2人の兄は、すでに10年以上にわたって投獄されていた。1971年4月、朴正熙と金大中の両候補が激戦を繰り広げたその年の春、休暇を日本の実家で過ごし金浦空港に到着した彼らは、保安司令部に連行され「在日韓国人学院浸透スパイ団」捏造事件の犠牲者となった。北朝鮮の指令で金大中に政治資金を渡そうとしたというこじつけだった。

金孝淳の『祖国が棄てた人々』（西海文集、2015年＝日本語版：明石書店、石坂浩一監訳、2018年）には、それと類似した捏造で人生を根こそぎ奪われた在日の祖国留学生犠牲者の数奇な逸話が無数に含まれている。

彼らが国家保安法違反で逮捕され「スパイ」とされた翌年に維新憲法が公布され、朴正熙永久執権体制が始動し大統領を官制間接選挙で選ぶ軍事独裁体制が、1987年6月民主抗争で全斗煥政権が崩れるまで続いた。死刑宣告を受けた兄たちは、その体制が崩壊してから17年、19年ぶりに出所した。

先生が早稲田大学第一文学部（フランス文学科）を卒業したのは、家族がばらばらになった事件から3年が経った1974年だった。すでに在学時代から彼の人生は、兄たちの救援活動と子どもたちを助けるために60回以上も玄海灘を行き来しながら、彼らの釈放を見ずに恨の多い人生を終えた母親と家族の世話に方向が決まっていた。文芸評論家の淑明女子大学の権晟右（コン・ソンウ）韓国語文学部教授が書いた文章に、このような一節がある。

「美しいエッセイは概して社会的イシューに無関心で、逆に社会的イシューに関心を傾ける鋭いエッセイは美学的に洗練されていない場合が多い。これに比べ、徐京植のエッセイは、政治的正しさと美学的品格を同時に備えている。尖鋭な政治的アジェンダを扱いながらも、深いペースと悲しみ、魅惑的な文体で満たされた徐京植の文章は、読者に格別の魅力を与えてくれる」（『徐京植 再読』）

1995年に「日本エッセイスト・クラブ」賞を受賞した『子どもの涙』など30冊余りの著書の多くに美学的品格があらわれているが、『時代を渡る方法』（日本語版『夜の時代に語るべきこと——ソウル発「深夜通信」』）などでも繰り返し描写される彼の幼少年期の悩みと傷、劣等感と自負、憧れと恐れ、不安、寂しさの交差は、読んでいる間じゅう深い悲しみを抱かせる。しかし不思議なことに、悲しみが力になる。その悲しみの源泉は、日本で「二等国民」とされ絶えず差別され抑圧されてきた在日朝鮮人の現実に対する透徹した正直な自己認識だ。

先生の政治的正しさと美学的品格の結合は、いまでも作動している植民地支配構造と歪んだ政治の現実の深淵に対する正直で勇敢な凝視と深い思惟、節制され淡泊で流麗な表現、勝算の有る無しにかかわらず真実を語ろうとする「投壘通信」の勇氣と意志があつてこそ可能だったのだろう。

そうしてこそ世の中を変えることができる。不条理な世の中を変えるのが彼の一生の課題だった。

これは植民地主義の心性に対抗し、時には激しい論戦を辞さない戦闘的で鋭い「論客」としての先生の面貌とも矛盾しない。先生のこのような面から、私はこのように書いたことがある。

「彼は闘士だ。しかし銃刀ではなく、文章を武器に戦う孤独な反植民地主義の闘士だ」

逆回転しながらすべてのものが浅薄になり、卑俗になっている時代に、より大きく迫ってくる先生の不在に胸が痛み、悲しい。

生涯苦痛と憂鬱に点綴された重い荷物を下ろして穏やかに休まれることを切に願う。

（『ハンギョレ新聞』2023年12月22日掲載に加筆の上、市民メディア『ミンドウルレ』に掲載／李杏理訳）

---

## 追悼・徐京植さん

佐喜眞美術館館長 佐喜眞道夫

岡部伊都子さんは、私に徐兄弟のお母さまのことを、想いを込めてたっぷり語ってくれました。しばらくすると、徐勝さんが立命館大学の学生を引き連れて私の美術館に来館されるようになりました。そして韓国の民衆美術の作家、洪成潭さんや光州市立美術館を紹介していただき、いまに続く韓国とのパイプとなっています。

徐京植さんと初めてお会いしたのは、京都での「岡部伊都子さんをしのぶ会」に出席したときでした。そのときに私が着ていた沖縄の喪服用の「かりゆしウエア」（沖縄でよく着られているシャツで、ビジネス用だけでなく冠婚葬祭用としても広く県民に愛用されている）を京植さんが気に入り、後日贈った頃から親しいお付き合いがはじまりました。ときどき徐京植さんから送られてくるメールは「厳しく、的確」で佐喜眞美術館を大切に考えておられていて、とてもありがたく思いました。それからさまざまな芸術家や先生たちを案内していただきました。北ソウル市美術館で私のコレクションで「ケーテ・コルヴィッツ展」も開催したおかげで、韓国とのパイプがさらに太く広くなりました。また、NHKのドキュメンタリー番組でパレスチナ人の弁護士で人権活動家のラジ・スラーニさんと徐京植さんとの対談を、丸木位里・丸木俊の《沖縄戦の図》の前で収録したこともありました。いま、私たち沖縄人はガザの惨状を沖縄戦での南部戦線と完全に重ねて考えていますが、極めて先駆的な対談だったと思います。

戦後70年の節目の2015年にNHKディレクターの鎌倉さんから「こころの時代」という番組で「害（そこなわれし人々のなかに 沖縄でコルヴィッツと出会う）」をテーマに、徐京植さんと対談をしてほしい、という依頼

が来たときは恐れ多くて震えあがりました。京植さんと私では、人生体験の苦労も学問的見識においてもあまりに違うからです。しかし、「ケーテ・コルヴィッツ」をともに愛しているという一点だけの共通項ならある。そして恐る恐る立ち向かったのが、NHKの番組でした。結果は大成功でした。すべては京植さんがいろいろな角度から私のことばをひっぱり出してくれたおかげです。多面的で深い対談が成立したのだと思います。約10年前の番組ですが、いまでもあの番組を見た方が「すばらしい番組でとても印象に残っていて、一度佐喜眞美術館を訪れてみたかった」と来館される方がいらっしやいます。

あるとき、丸木位里・丸木俊の仕事を在日朝鮮人の立場から展評をお願いすると「あれにはずいぶん苦労したよ」といいながらすばらしい展評を書いていただきました。それは、丸木夫妻の仕事を国際的視点・観点から「国家権力と対峙する」という全く新しい指摘でした。それまで私は丸木位里の「戦争は国がやるんじやが、国民はそれを止めんといかん。止めることが出来なければ国民もろとも地獄におちるんじや」という言葉をたんなるエピソードとして聞いてきましたが、京植さんの指摘を受けてこれは丸木位里の人生哲学から出てきた重大な言葉として考えるようになりました。

世界の情勢はますます理念崩壊が進行しています。もう京植さんの新しいことばを聞くことはできなくなりましたが、この状況に敢然と知力を振り絞って立ち向かった京植さんの人生に対して私は拍手と感謝をもって見送りたいと思っています。

2024年4月

---

## 不在の表象としての暗示 — 徐京植さんを偲んで

増田 常德

私が初めて徐 京植さんに出逢った時、その印象が余りにも鮮明で、洗練された空気感に包まれていた。在日朝鮮人の作家と云うことで気難しさを想像していた私は、対面するや否や、礼儀正しい柔和な口調と風貌に緊張が溶けたことを記憶している。この姿勢は終始一貫して変わらなかった。ベージュ色の上下揃いのスーツにソフト帽までが統一された、お洒落で着心地の好い、フランクな着こなしに好感をもった。この機会をつくって下さったのは、京都在住の画家 Y さんで、京植さんの良き親友である。

私の父親は、軍国主義に染められ、先の戦争を容認しているところがあった。従って、朝鮮半島を植民地にし、朝鮮民族を支配する片棒を少なからず担った者の子どもとして、軍事教練（今で云う虐待）さながらで育った。戦後間もない頃、破傷風に罹り生死を彷徨ったが、幸い一命を取り留めた。後に好きな美術への進学を志望したが許されず、家出を決行し勘当の末上京、独学で絵描きを志した。

私の故郷は五島列島で、キリシタン弾圧と迫害の歴史が身近にあった。また、長崎は原爆の洗礼を受けた地でもあり、私が生まれた1948年は済州島4.3事件の勃発と重なる。こうした負の連鎖の歴史は、何時しか私の潜在意識を突き動かし、美の本質のありように疑問を投げかけ、避けて通る事の出来ない問題提起を帯びた絵画表現になっていった。

東日本大震災後の2012年に開催した私の個展で、髪を丸めた僧侶そのものの姿の京植さんと対談を行った。震災で荒廃した三陸沿岸を取材し描いた浄土ヶ浜 — 作品「寂光」をこの他褒めてくださった。「常德さんは、…日本の現代美術の流れの中では異色で稀な存在だと思います。こういう人は孤独だろうと思うのです。」と云う。確かに、孤独とは云い難いものの厳しい領域を歩いている。そんな私の生立ちと、京植さんの生立ちが対岸の風景のように懐かしく見え、また一方では恐れ慄き目を伏せたい光景にも映った。互いに黒い海峡（対馬海峡）を挟み、地底で繋がっていたのではと、その心情を語ったことがあった。

絵画を接点に互いの指針が紐解かれ、美術や音楽などの芸術が人間の最大の創造物であることを確かめ、言葉や文字で表現できない極めて不安定な実体を想起させられる芸術に心魅かれあった。その様な、審美的感性を有する心的現象が京植さんの書きおろす厳しい文脈に流れていて、読者はつい引き込まれてしまう。講演でも、圧倒的な教養や知識、また創造芸術に対する造詣を通して繰り出す、殿上人の法話でも聞いているような心地に、何時しか共感を覚えた。その余韻には必ず、異界の崇高な香りを漂わせる不思議な魅力があった。

京植さんという一人の人間が正直に生き、世の中を凝視する鋭い眼差しは、人間の平等と尊厳に裏打ちされ、苦難を乗り越えてきた誇りが悠々と体内を流れているのを見るようであった。在日朝鮮人の苦悩は書物で知る狭い範囲にすぎない私は、京植さんの心中に触れる都度、渦まく葛藤には計り知れないものを感じていた。その差別や偏見に曝される日常、また肉親の兄達二人が政治犯として投獄され、その救済活動に奔走するなど、痛みを耐え凌ぎ苦しみを抱えていた京植さん。その痛々しい亀裂に触れる悲痛な叫びを秘めながらも、人間としての良心を失わず、凜として微動だにしない主張に些かの陰りもない。それ程、美しく大きな度量で包み込む人間観は、今日では極めて稀で、貴重な知の巨人であったと思っている。

そこには朝鮮民族を誇りとしていた、京植さんの母親の存在が大きかったと聞く。背負わされた越境の軋轢に、幾度も耐え忍んできた強い信念と深い愛情の賜物であったと思う。どんなに差別されようと、虐められようと、無視されようと、悠々と真っ正直に歩き、且つ闘っている姿に接し、エールを送りながらも私の方が勇気をもたらしてきた。

京植さんと最後に会ったのは、昨年（2023）11月3日、田川市美術館で開催された私の展覧会「黒い抗脈」の会場での対談であった。この時も淡い色のスーツとソフトで登場し、頗る元気そうに見えたが、片手にステッキを携えていた。歩く歩幅もお会いする度、狭くなりしんどそうであった。多忙で体調が思わしくない中、遠路信州から九州まで駆けつけて下さり、有難かった。対談は、ガザの悲劇に胸を痛める人権運動家ラジ・スラーニ氏へ連帯を呼びかけるメッセージで始まった。京植さんや私にとっては、ウクライナやガザの戦争が不条理極まりない切実な問題であるが、世間の関心が余りにも軽薄なのに触れ、苦しみが一層増している。「生きている事の恥を感じるのです」と自身を攻める様子も、幾度か聞いた。普段から、冗談や軽はずみな話は聞いたことが無かった、対談終了後の談笑で、「常德さんは限界を感じた事はないですか」と尋ねられた。そして、堰を切ったように「理念や使命感、理性の呼びかけを超えて表現せざるを得ないというのが芸術家の真の姿だと思う」など、情熱的に語られていた。今想うと、体調が優れない中であって、どうしても私に伝えておきたいことであったのだと重く受け止めている。

一昨年、『徐京植 回想と対話』（高文研）本が届いた時、手に取るやその表紙にハッとさせられた。福島の荒廃した地平に佇む京植さん、その後ろ姿がカスパー・ダーヴィト・フリードリヒの作品『浜辺の僧侶』と重なったのだ。「……彼が眺めやるのは、低い水平線の彼方に無限に広がる茫漠とした虚無の空間である。……嵐の気配を漂わせる空はぼんやりとした……それは何かしら、人の心に不安をかきたてる不気味な光景である。……」（シエリング年報・神林恒道）

京植さんが眺めて止まないその視線の先こそ、渴望する未来がシルエットとなって浮かびあがってくる。絵画の中で描かれる示唆的想像への呼びかけが、暗く混沌とした識閥を目覚めさせる手法であり、見る者を無限の境地へ誘う。苦痛や邪念から解き放たれてこそ自身の心に立ち返り、人間が自然界の一部として壮麗な美に包まれる。このような暗示を受けるのは、私が接してきた人々の中で、後にも先にも京植さん以外にはいない。そんな気品に溢れ、純粋な感情を放出し続けた京植さんに畏敬の念を抱くと共に、導かれる喜びを噛みしめている。

2024.4.9 記

## 徐京植先生の「美術巡礼」 — 創造的対話の美学

古川美佳

数年前、実家に置かれたままだった段ボール箱を開いた。韓国への留学前後に求めた本が詰まった中には、徐京植『私の西洋美術巡礼』（みすず書房、1991）と、そして大学生時代、心をわしづかみにされた原民喜『夏の花・心願の国』の文庫本が見つかり、「こんなところにあった！」と「再会」を喜んだ。徐京植先生（私にとっては「先生（ソンセン・ニム）」としか言いようがない）の『私の西洋美術巡礼』を、神保町の岩波ブックセンターで手に取った当時の光景が今でも浮かぶ。私は韓国からの留学を終えたばかりのころで、この本が出版されてさほど経っていなかった。「あの徐勝・徐俊植兄弟の弟さんがなぜ美術の本を書くの？」と不思議に思ったのだ。韓国で民主化運動の高揚冷めやらぬ時期に、韓国の美術 — 特に民主化運動と呼応した「民衆美術」を知りたくて留学した自分にとって、独裁政権下の弾圧に抵抗し続けた徐兄弟たちと「西洋美術」との組み合わせがいかにも奇妙に感じられたのだ。

だが、私が京植先生の美術への考察が並々ならぬものであり、西洋美術を中心に「巡礼」する真意を理解できるようになったのは、もっとずっと後になってからだ。その後も「美術巡礼」は続き、さらには原民喜とも結びつけられ語られもした。それらに接しながら、「美術作品と対話し、コラボする」かのように芸術を語ることができると、という驚きとともに、芸術の営みに潜む普遍性への道筋を見出せたような喜びを感じた。それは学術用語が並ぶ論文や、情報と画像で埋め尽くされた「現代アート」評になじみず、むしろ反感すら覚えていた自分の頭を殴られたような、あたたかくも厚みある「発見」だった。

そんな京植先生に直接お会いしお話しできるようになったのは、たしか2004年11月に東京経済大学で行われたシンポジウム「ディアスポラ・アートの現在」、同年12月に行われた民衆美術の画家・洪成潭氏インタビュー通訳（『季刊前夜』第3号＝2005年春号掲載）によってであった。

以降、日本の画家・増田常德氏の展覧会や沖縄、フクシマ、パレスチナなど美術関連の催しにはいつもお声をかけてくださり、ご著作もたびたび送ってくださった。金善姫さん（元大邱市立美術館・釜山市立美術館長）や金恵信さん（元沖縄県立芸術大学教授）ら美術関係者とお連れ合いの舩橋裕子さんとおしゃべりする傍らでも笑みを浮かべておつきあいしてくださった。また韓国光州から画家のシン・ギョンホ氏が来日した際、その一行の案内役を仰せつかり、あるいは『越境画廊』の表紙を飾った申鶴澈氏の作品掲載許可を本人に確認したりもした。またコロナ禍でエゴンシーレの作品について語ったエッセイ（ハンギョレ新聞2020年6月8日）を美大の私の授業で紹介させていただいたときは、どんな言説や美術情報よりも学生たちの心に響いた。そこには「死」に寄り添う京植先生ご自身の体験から滲む魂の声があった。

「国民」の枠からはみ出た人たちの自己表現に「ディアスポラ・アート」の根を探り、西洋美術からついに辿り着いて「韓国の美術」について語ろうとなさったときは、「韓国」ではなく、あえて「私の朝鮮美術巡礼」（『越境画廊』副題）と言い切られた。朝鮮民族が経験した近現代史の過程が、民族の呼称そのものに分裂をもたらしている現実を正視し、むしろその傷も痛みもありのままに正直に表現する呼称として「朝鮮」を選んだというのだ。

「朝鮮美術」とはそうした隘路に切り込む闘いを強いられることを承知し、だからこそ、「プレモダンとポストモダンの結託である天皇制」（徐京植）下の日本の芸術文化への絶え間ない批判と挑戦を避けなかったのだ。

ヨーロッパであれ、東アジアであれ、越境的で混濁した「はみ出たもの」の美学を解きほぐそうとした京植先生のその懐には、いわれなき偏見や「暴力」から朝鮮民族の美的営みを救い出そうとする慈しみのまなざしがある。だからだろうか、「朝鮮美術文化研究者」と名乗る私にまでも、さりげなくエールを送ってくださっていたように思えてならない。

歴史的現実から遊離することなく対象と向き合い、芸術的想像力によって作品自体の力を引き出しながら、い

わば「創造的対話の美学」とでもいう可能性を示してくださった徐京植先生。そうした知恵の言葉に誘われることがもうないかと思うと、ただただ大きな喪失感を覚えるほかない。

それでも手を合わせ、空を見上げ、話しかけてみる。京植先生、本当にありがとうございました。いまこそ、分断も分裂もない、時空を超えた「巡礼」の旅を満喫してくださいますよう、心よりお祈り申し上げます。

---

## 徐京植さんを偲んで

金 富子

徐京植さんに初めてお会いしたのは、札幌で大学生だった1980年代初め頃だと記憶する。徐さんは、札幌で開かれた徐君兄弟を救う会に関連する集会のために、救う会の方といっしょに来たのだ。その集会の学生スタッフだった私は、タクシーで徐さんたちを案内した。その車中で徐さんは初対面の私に向かって、いきなり「民族の定義は何か」というようなことを聞いてきた。口ごもっていると、「スターリンの民族の定義も知らないのか」というようなことを言われて、面食らったことを覚えている。当時、韓国では1979年10月朴正熙大統領の被殺、ソウルの春、1980年5月光州民衆抗争、その後鎮圧され沈黙を余儀なくされるという激動の時代だった。これらに刺激されようやく「民族」に目覚め韓国の民主化運動に向き合うようになったが、その意味するところを深く追究することがなかった不勉強さを直撃された思いだった。とともに、その言い方に少し傷ついたことも正直に告白しておこう。

1990年代に入って、私は日本軍「慰安婦」問題に関わるようになるが、徐さんの著作を読んで第三世界の植民地主義の暴力に視野を広げるとともに、「民族」の定義について学生時代の記憶がよみがえった（『「民族」を読む』『分断を生きる』等）。スターリンの「言語、地域、経済生活、文化の共通性」という「民族」の定義に、徐さんは「在日朝鮮人」の視点から、この定義からの欠落を「在日」にもたらした根幹にある植民地支配と南北分断という「歴史的経験の共通性」を加えたのだ。さらに、その克服のために「本国」や他地域の同胞とつながり共闘する可能性を示唆した。徐さんは、「民族」について切実かつ誠実に考え続けてきたのだろうと思った。

「民族」とは何か、「在日朝鮮人」とは何か、どう生きるのかについて悩んできた私を含む同世代、後続世代の在日朝鮮人にとって、徐京植さんの著作はそれらを深く思考していくための羅針盤のようなものだった（私の場合はジェンダーが加わったが）。

徐さんと再会したのは、1997年9月、日本の戦争責任資料センター主催シンポジウム「ナショナリズムと『慰安婦』問題」の時だった。日本社会ではその前年から「慰安婦」問題を攻撃する歴史修正主義が顕著になるとともに、アカデミズムではナショナリズム批判一色だった。シンポジウムでは西野瑠美子さんと当時大学院生だった私がコーディネーターをつとめ、パネラーとして上野千鶴子さん、吉見義明さん（パネル1）、徐京植さん、高橋哲哉さん（パネル2）が登壇した。パネル1『「慰安婦」問題と歴史学』、パネル2「ナショナリズムをめぐる——責任と主体」をテーマに基調発言があったあと、パネル・ディスカッションに入った（同センター編『シンポジウム ナショナリズムと「慰安婦」問題』青木書店、1998年）。300人教室は満席で立ち見もあり、熱気に満ちていた。

徐さんがこの場に招かれたのは、『自由主義史観研究会』『新しい歴史教科書をつくる会』の動きを憂慮する在日朝鮮人のアピールの提言者だったからだが、徐さんの「私の母を辱めるな」に対し「民族主義的ではないか」と批判する声もあった。パネル2で、徐さんは、「慰安婦」問題は「植民地支配そのものの違法性と強制性」に視点を広げ問い直すべきだと述べた。パネル・ディスカッションでは、この発言に上野さんが『「慰安婦」制度を植民地支配の枠で捉えるなら、日本人「慰安婦」を問題化できなくなる。これは在日韓国人としての徐さんの闘い』

「性暴力被害者としての女性の問題を、徐さんに解いてもらおうとは思わない」と応じた。これに対し、徐さんは「日本の女であるというだけで自動的に日本人としての集団責任は解除されない」、反転して「朝鮮人ということだけで私が持っている男性中心社会の特権は解除されない」、さらに「私の母を辱めるな」に対しても「虐げられた人の立場に立ち、その声を語るのは自分自身の義務」と反論した。これに上野さんは「家族用語で語るべきではない」と再々反論するなど、他のパネラーたちとのやりとりも含めて、議論はまったく噛み合わないまま終わった。

徐さんは、「慰安婦」問題において民族とジェンダーを対立物として捉えるのではなく、両者の複合性を捉えつつ日本社会に蔓延する植民地支配（民族支配）への健忘症、日本人としての責任の不在を鋭く指摘したのだ。こうした両者（他のパネラーも含む）の「慰安婦」認識の隔たりは、その後に歩む道がさらに大きく隔たっていくのを予見するものだった。なお、2000年代に入って、東京外国語大学の中野敏男さん主催の戦後東アジアプロジェクトで徐さんに再び出会うことになるが、紙幅が尽きたのでここまでにしたい。

徐京植さん、ありがとうございました。心から哀悼の意を表します。

---

## 徐京植氏の言葉の力（追悼文に代えて）

丸川哲史

私が初めに手に取った書物は『私の西洋美術巡礼』（1991年、みすず書房）であった。この著作に非常に強烈な印象を残したのには、個人的な理由もあった。私の人生上の、1980年代の記憶と重なるところがあったからだ。私は大学のサークル活動で、光州事件の記録映画を上映したり、徐兄弟釈放のための講演会を開催したりしていたが、いずれも思う以上に学生（観客）が集まらず、一種悲哀を帯びた心境であった、この心境と重なっていた。

そして90年代の後半にかけて、徐氏の活発な行動が展開される。一方の私は修士を卒業した後、90年代の半ばまで、海外での日本語教師の下積みを経、98年に大学院に復帰した。私は台湾文学を研究し、さらに中国文学を研究し始めていた。ただ私は80年代まで、韓国における民主化運動に対する憧れを抱きつつも、今から考えるとそれまで、典型的な先進国アナキストタイプの思想を有していた。しかしこれが、1990年代を通じて、変化を遂げる。簡略化して申せば、「民族」の視点が生じたのである。

思い起こされるのは、このころよく読まれていたところのハバーマスを起点とする市民社会論であった。この時期、ハバーマスに依りながら、市民社会内部の理性的なコミュニケーションにより、古い国家の桎梏が除去されるだろう、といった議論であった。それは、韓国など、東アジアにおける民主化運動を下支えする理論ともなり、積極的側面はもちろんあった。だが90年代、私の中である「問い」を生じさせるものでもあった。市民社会論による政治の展望は（例えば中国の場合、あるいは日本の場合にも）裏切られたのではないか。私たちが目にしたのは、それとは逆のあり様であった。中国のことはさておき、日本で言えば、近年まで私の中で苦々しくも演じられていた安倍元首相のパフォーマンスと、それに呼応するような、ネトウヨなども含む右派勢力の増長であった。

徐さんの日本の戦後社会に投げかけた基本テーゼ——これを私なりにまとめると、日本人の戦争と植民地支配に対する責任、そして天皇制を廃絶できない日本人の不自由な思想、ということになるだろうか。ここで問題となるのは、端的に「倫理」である。ここに関わって来るのは、徐氏が自身のことを「作家」と定義されていることである。

＊

サルトルの『文学とは何か』（1948年）は、20世紀文学の可能性を大きく開いた論として、1950～70年代、多

くの知識青年を捉えていた。そして90年代後半、人文書院の新版（1998年版）の解説者、海老坂武氏は、解説「五十年後の『文学とは何か』」において、サルトルのこの著作は戦後フランス特有の文脈、「社会主義」イメージに対する過度の信頼など限界があったもの、と述べていた。その一方、サルトル文学論の特異な「力」を継承させんとする、50年後のエコー〔反響〕も響かせていた。

なぜここで『文学とは何か』を持ち出したのか。「文学」にかかわる「倫理」、さらにはその「倫理」が強く近代以降の「普遍的なもの」にかかわっているもの、と直感されたからだ。ここから『文学とは何か』の中身（目次）と突き合わせてみたい。

- 1 「書くとはどういうことか」
- 2 「なぜ書くのか」
- 3 「誰のために書くのか」
- 4 「一九四七年のフランスにおける作家の状況」

まず、1「書くとはどういうことか」において、サルトルは、書くことと絵画や彫刻や音楽との違いというものを語っている。そこで散文だけが取り得る姿勢として、サルトルが考える倫理的=批評的な価値が説かれている。またそこから、倫理的=批評的に如何に書くかについて自覚的な者を「作家」と定義し、さらにあまりにも有名となった概念、「アンガージュマン」と関係づける。ここで気づくのは、徐氏ほど、自身が（日本社会の中で）どのように書くかについて自覚的な人はいないだろう、と思うことである。その一方、興味深く感じられるのは、サルトルにおいて周辺化された「絵画」、これに向き合い語ることが徐氏の中で自身のスタイルとして選び取られていた。さらにその先がある。『私の西洋美術巡礼』が韓国で翻訳され、多くの読者を獲得した事実である。ベンヤミンをもじって、「翻訳するとはどういうことか」という問いを誘発してみたい。思うに、この翻訳版は、徐氏の家族にかかわる悲劇的経験、つまりまた在日朝鮮人が祖国たる韓国に渡ったことによって生じた経験が、逆に韓国において共有されるプロセスが示されている。ある意味ではある在日家庭の「特殊」とも言える経験が翻訳により、その「特殊」が「特殊」ではなくなったのだ。

次に、2「なぜ書くのか」。徐氏の仕事を眺めた場合に、「書くことを選ぶ」ことについては、『回想と対話』の中で詳述されている。それ読む限り、それは完全なる自然でもなく、また完全なる必然でもなく、しかし「選択」の結果であることが分かる。それこそが、「アンガージュマン」である。元より「アンガージュマン」とは、積極的主体的な「参加」というよりも、むしろ何かに「拘束されている (engaged)」という意味が強いのだ。つまり、徐氏の「書くこと」の選択、それはすなわち「拘束されている」結果とも言える。さらに、その「書くこと」の奥にある意識とは、サルトルからすれば、つまり「人間とはなにかを発見するものだという意識」であった。翻って、何かに拘束されていない限り、人間は発見できないもの、とも読めてしまう。ここでまた、「なぜ書くのか」にベンヤミン的な捻りを加えたい。つまり「なぜ翻訳されたのか」。もちろん具体的な文脈で言えば、様々な偶然の結果なのであろうが、徐氏の書物が翻訳されるのはむしろ「必然」でもあったとも言える。すなわち徐氏の著作を形作る文脈——在日朝鮮人が生じた（ポスト）植民地主義の背景、そして朝鮮半島が分断された冷戦の背景——に「拘束されてある」結果なのだ。

さらに、3「誰のために書くのか」の次元へ進もう。サルトルは簡潔に、読者全体のために、つまり「普遍的読者」に対して書くのだ、と声明する。サルトルは例として、リチャード・ライトを取り上げ、こう述べる。ライトは、当時の状況として最も虐げられていた南部黒人に対してではなく、北部の教養のある黒人、及び善意の白人（左翼の民主党员、急進派、CIOの労働組合）にあてて書いた。だが、「彼は彼らを通じて全ての人間を対象としたのである。永遠の自由が、彼の追求する具体的な歴史的な解放の地平線に垣間見られるように、人類という普遍性も、彼の読者という具体的な歴史的な集団の地平線にある」と述べる。徐氏は日本語で書くことを「選択」し、だからどちらかと言うと左派的（また「民族」に理解のある）日本語読者に向けて書いたはずである。しかし先に述べたように、偶然でもあり、必然的でもあるプロセスにおいて、韓国の読者に向けて翻訳されることになった。「誰のために翻訳するのか」は一見して自明でありつつ、自明なものでもない。というのは、さらに、朝

鮮民主主義人民共和国の人々にも読まれ、またさらに別の言語へと翻訳される可能性をも原理的に有するからだ。すなわち、翻訳を媒介として、徐氏の著作には、「普遍の種子」が孕まれていた、という言い方ができる。それはまさに、日本による朝鮮半島に対する植民地支配の歴史と、冷戦による分断が終わらない現実が凝縮した種子である。すなわち、その現実の解決が世界において待たれているという普遍的課題が孕まれていた——徐氏の言葉が翻訳される契機において、そのことが確認されたのだ。

そして、4「一九四七年のフランスにおける作家の状況」である。当時のサルトルにとっては「社会主義」の到来は、必然と考えられていた。これに相当するものを徐氏の思想に探すならば、やはり「民族解放」となるだろう。が、ここにおいても大きな差異が横たわる。まず、サルトルの追求する「社会主義」への志向性は、やはり当時のフランス社会の内部にあり、またその実現は、(当時は)間近に迫った感覚であった。その一方、徐氏の「民族解放」を追求する対象は、ある意味、曖昧ではある。韓国でもあり、朝鮮民主主義人民共和国でもあり、あるいはその眼差しはパレスチナにも向けられていた。さらにその「民族解放」の実現は、決して間近なものとも感得せられていない。私がここで言いたいことは、そのような理念としての「民族解放」、日本では遠い場所に置き去りにされている「民族解放」を、徐氏はものを書く上で手放さないでいたことの意義である。

\*

最後に、この「民族解放」の意味を日本(人)に当て嵌めれば、どうなるのか。それは、日本人がどう生まれ変わるか、という課題となるだろう。一般的には日本人は、日本人であることに拘束(engaged)されているとは感じていない。だが、日本人として生まれたことは偶然ではあれ、日本人として生きることはそうではない。日本という歴史的存在に拘束されているのだから。日本人が自由になるには、また人類の普遍的価値に貢献するには、この拘束の意識から出発する以外にはない。徐さんは、私にそういうことに気づかせてくれた。

---

## 詩人は沈黙しない

中村一成

私自身の出自もあり、マイノリティと彼らを取り巻く問題を書きたくて職業ライターになった。初任地の四国・香川県に赴任したのは1995年春のこと。新人記者の担当は事件事故である。刑事訴訟法すら順守されていない人権侵害の最前線で、それを担う警察官と付き合う。「人権だ」「モラルだ」などと言えばその段階で相手にされなくなる。「市民感覚」番外地での日々、志とは似ても似つかぬ生活に疲弊しきっていた。

そんな中で読んだのが徐京植さんの文章だった。「従順な新聞社員」を育成するサツ回りの現場で、徐さんの言葉は正気を保つ「よすが」だった。深夜の帰宅後や滅多にない休みにくり返し読み、エッセイの一部や全文を書き写した。いま自分で書いた文章を読んでも、彼方此方にその思想的断片を見つける。数年後にはバックラッシュが本格化する。全国の地方議会で中学歴史教科書からの『慰安婦』記述削除を求める「運動」が高揚し、私の暮らす香川県はその最前線になった。事件担当を放り出して県庁に入り浸り、「削除反対」の記事を書き連ねた。右派団体や県議会の保守系議員のみならず、同業者や職場の先輩や管理職から陰に日向に非難されたが、それでも書き続けたのは徐さんの影響だった。

初めて会ったのは二場所目の京都、立命館大学で徐さんの講演があり、参加したのだ。

「あなたはどんな人ですか？ 多言語の海を自在に泳ぐ人ですか、それとも単一言語の囚われ人ですか？」、挨拶した時の第一声である。本気が冗談か判断しかねたが(その後の付き合いでは、結構「ベタ」なギャグも言う人だった)、初体面、ましてや私淑の人である。噴き出すわけにもいかなかった。講演内容は地域面で連載した。肝を外していないか不安だったが、授業でその記事を使っていると聞き、単位を認定された気がした。

以来、幾度もお会いしてその警戒に触れてきた。呑み会などで徐さんの話に集中していると、唐突に「で、あなたはもうどう思うの」と訊いてくる。最初は緊張もしたが、「対話」の力を信頼する徐さんの教育者としての側面を垣間見た。知識層には苛烈過ぎる程に厳しい人だったけど、学生には鷹揚で、その「小さな変化」を我が事として喜んでいて。

話好きで気さくな人だが、相手を慎重に見極める一面もあった。講演会や集会で年に数回はお会いし酒食を共にしていたが、個人的にお茶や食事に誘われるようになったのは、初体面から十年ほど経ってからだ。徐さんお気に入りのそして現存する喫茶店やパブで待ち合せて会話する。小説執筆への思いも伺った。「あなたが例え三文小説と思うものでもね、書き手にとっては充足があるんだよ」。目を輝かせて語る姿を思い出す。

簡潔にして豊穡な達意の文章、思考の展開、芸術の「見方」……徐さんから学んだことは数しれないが、一つ挙げるならばそれは「姿勢」だった。何があっても譲れない一線に踏みとどまり、書き、語り続けること。2012年12月、民主党政権が無残に自壊し、レイシズムと歴史改竄を背骨とした安倍晋三が首相の座に返り咲く直前、いわば破局前夜の講演で徐さんは覚悟を込めてこう語っている。

「さて、詩人とはどういう存在であろうか。詩人とは、どういうときにも沈黙してはならない人のことだ。つまりこれは、勝算があるかないか、効率的かどうか、有効かどうか、という話とは違うということである。

私がなにかを述べると、ある人たちは『君は正し過ぎる、でもそれじゃ勝てないよ』とか、『君の主張を浸透させるためにはもっと優しい言い方をしたほうがいい』などと助言してくれる。ありがたいけれど、それは間違っている。それは勝算とか有効性の話だからだ。そうではなく、魯迅には遠く及ばないとしても、こう生きるのだ、これがほんとうの生き方だ、ということを示さなければならない。詩人がそれをしなければならないのだ（『詩の力——徐京植評論集Ⅱ』2014年、高文研）。

この言葉に、一生かけて応答していきたい。詩を書くことはできなくとも、詩人を生きること、沈黙を拒むことはできる。それは勝ち目があるか、展望があるか、具体的な結果が出せるか、支持を広げられるかといった話ではない。どれだけ状態が厳しくても、先行きが見えなくとも、孤立しても、人間であるとは如何なることか、人間にとって大事なことは何か、本当の生き方とは何か、人間とは本来こうあるべきではないか、今は違うが、世界はこうあるべきではないかについて書き、語ることだ。奴隷貿易と植民地主義の遺制としての世界が、ますますそのグロテスクな本性を露わにする中だからこそ、この言葉は重要性を増す。ガザのただ中だからこそ、私たちは詩を書かなければいけない。詩を読まなければいけない。

徐さんの言葉は思想的故郷であり今後の道標だ。受け継いだ言葉を現実の中で展開し、そして次の世代に繋いでいきたい。ありがとうございました。

---

## 徐さんの「呼びかけ」

高和政

私の徐京植さんとの「出会い」は、朝日新聞に掲載されたチマ・チョゴリ切り裂き事件にかかわる記事（1999年3月6日朝刊）を通してでした。徐さんは、民族服の女子生徒に暴力が集中する日本社会の現実を批判しつつ、彼女たちをその差別の矢面に立たせてきた「私たち」の問題についても指摘し、次の言葉で記事を締めくくっていたのです。

「すべての朝鮮人が、あらゆる形で朝鮮人を表明して生きる。それが彼女らへの連帯になる。」

この言葉に、当時の私は頭を殴られたような衝撃を受けました。日本式の通名を使い息をひそめるように生きてきた自分こそ、日本社会の差別と暴力に加担しているのではないか。この言葉と出会ったことをきっかけに、

朝鮮人であると周囲に知られたらどうになってしまうだろうという恐れを抱いてきた自分自身に、我慢がなくなりました。

この「出会い」の後、徐さんの著作を集中的に読むようになりました。中でも特に自分にとって大切な文章となったのが、『分断を生きる』（影書房、1997年）に収められた「新しい民族観を求めて」です。この論文で徐さんは、在日朝鮮人の形成史とその差別状況を振りかえるとともに、言語や文化、さらに名前など「民族」の「資格」を喪失した在日朝鮮人は「朝鮮人」と言えるのか？ という問いを發します。この問いに対して、そのような喪失の痛みこそが、われわれがほかならぬ「朝鮮人」であることの証なのだ、と断言するのです。

徐さんのこの言葉は、私をはっきりと救ってくれるものでした。朝鮮語ができず、歴史も知らず、通名で生きてきたこと。「ばれたらどうなる」「なぜ私は日本人ではないのだろう」と不安を抱えてきたこと。これらすべては、私が「朝鮮人」であるからこそのことなのだ、実感できるようになったのです。

高和政という本名を名乗るようになった後、幸運にも徐さんと面識を得ることができました。それはちょうど、後に「歴史主体論争」と名づけられる一連の議論のまっただ中で、植民地支配責任・戦争責任を回避し続ける日本政府や知識人に対して、徐さんが徹底した批判を展開している頃です。

徐さんが若手の在日朝鮮人研究者とともに開いていた研究会に参加したり、東京経済大学の授業にもぐったりする中で、甘い論理を批判しきる徐さんの言葉とは、「呼びかけ」に他ならないのだと、実感するようになりました。日本社会が戦後積み重ねてきた最良の部分をやすやすと手放し、「頹落」し続けていく様を直視しながらも、徐さんは「呼びかけ」を諦めることはなかったのです。

2004年に創刊された季刊『前夜』の編集委員に、徐さんとともに私も名を連ねることになりました。創刊に際したリーフレットに、徐さんは「希（まれ）な望み」という短い文章を寄せています。徐さんが敬愛してやまなかった、魯迅の「絶望の虚妄なることは、まさに希望と相同じい」（「希望」）という言葉をもまえてのものであったのだと思います。絶望的な状況のなかで、その絶望を見定めるからこそ、わずかに立ち現れる「希な望み」。徐さんは、突然の旅立ちの直前まで、この意味での「希な望み」を私たちに語り、「呼びかけ」を続けてくださいました。

ふりかえれば、『分断を生きる』の巻末に収められた文章は、「もはや黙っているべきではない」でした。「私たちが在日朝鮮人は、もはや黙っているべきではない」。徐さんの言葉に、私は今も「呼びかけ」られ続けているのです。

---

## 私の思想の土壌にある徐京植

崔徳孝

徐京植先生との出会いがなければ「朝鮮人」としての今の私は存在しないであろう。大学2年生の時に初めての海外滞在で韓国パスポートを持ち、そこに記載された朝鮮名を初めて使用したことがきっかけで「自分は何者なのか」と悩むようになった。それまで20年間「日本人」として生きてきた私が「朝鮮人」として生きる決意をし、その後、実存的な思想と学問の対象として「朝鮮」と向き合うようになった原点に徐先生との出会いがある。当時、立教大学で非常勤講師として教鞭をとられていた徐先生の「人権とマイノリティ」講座を聴講し、毎回のように最前列の席に座り先生の講義に聞き入っていた。先生はよく授業の終わりに学生たちに短い感想文を書かせて提出させたのだが、私は一度だけ自分の悩みについて書いたことがある。後日、授業後に徐先生が感想文を手にして私の席にこられて「これを書いたのは君だね」と微笑みながら声をかけて下さった。履修登録もせずに聴講していた私を見つけ声をかけて下さったことがきっかけで、私は徐先生と出会うことができた。そして徐先

生との出会いを通じて、私は「朝鮮」と出会った。先生から勧められた書物を渉猟し、朝鮮半島・在日朝鮮人に関する集会に参加し、同じ悩みを持つ在日同胞学生の仲間を得た。大学の交換留学制度を利用して韓国の延世大学へ「母国留学」をし、大学卒業後、朝鮮近現代史を研究するために大学院への進学を決意した。こうした人生の転機にいつも徐先生の温かい励ましと啓発があった。朝鮮語の時事記事を読み朝鮮語で議論する小さな読書会を先生と一緒に立教大学で開き、2000年4月に東京経済大学に赴任されると、先生の研究室を拠点に他大学の在日同胞学生たちと「民族問題研究会」を開いて一緒に勉強させていただいた。今から思うと、著作だけでなく「徐京植」という作家・知識人の思想に直接取っ組み合うことのできる至極贅沢な時間であった。

「民族」と「言語」に関する固定観念を批判し、在日朝鮮人のあり方を日本だけでなく「本国」との関係の中で、さらには「近代」にまつわる普遍的な課題の中で思索する徐先生の思想から受けた影響は計り知れない。日本・朝鮮半島の「現場」を離れ海外に移住した私が「在日朝鮮人」として生きるとは？ 英語圏のオーディエンスに向けて在日朝鮮人の歴史を語ることの意味は？ こうした自問と格闘を続ける中で徐先生の著作を読み返し、私なりの「答え」を探そうとしてきた。それはまた — 非常に大それた言い方ではあるが — 徐先生の思想を引き継ぎ、「現場」を超えて深めていく営みに結実しなければならないと自分に言い聞かせている。最初で最後となくなってしまった徐先生との対談で、私は次のように述べたことがある。

「[アメリカやイギリスで] マイノリティ出身の研究者たちの批判的な議論や思想的な営為に触れながら、在日朝鮮人の歴史や経験からも何か世界に残していかなければならないと強く感じています。[...] 在日朝鮮人の経験の普遍的なつながりを思想的に追求し、また言葉として残してくれているのが徐さんの作品であると私は思います [...]」（早尾貴紀・李杏里・戸邊秀明編『徐京植 回想と対話』高文研、2022年、p.201）  
徐先生との思い出を偲び、在日朝鮮人作家・知識人「徐京植」の思想を引き継いで世界に残していきたい。

---

## 主体（チュチュエ）をどこにたてるのか — 在日朝鮮人の遺産と教訓としての徐京植

池允学（チ・ユンハ）

高校時代の教員の紹介で、徐京植さんのもとの学びに東京経済大学に入学した2014年4月からもう10年が経つ。自分の徐京植さんへの想いを文章に起こすのはとても辛く自信がないが、それでもいま読者に、社会に伝えたいことをここに記したい。支離滅裂な文章かもしれないが、その支離滅裂の間にある空白も含めて、ぜひ聞いてもらいたい。

\*

自分は2018年から社会人として、慣れない仕事や複雑な人間関係など、社会の荒波の中で洗礼を受けながら、一方で在日朝鮮人の活動や歴史勉強も続けている。そのなか度々行われていた徐さんの講演会には時間の合間を縫って参加していた。2020年以降のコロナ・パンデミックを機に、徐さんとお会いする機会が極端に少なくなってしまったが、そのなかでも様々な媒体で活動される徐さんの姿に、自分も頑張らなければといつも勇気をもらっていた。

その中で、徐京植さんの訃報はあまりにも唐突なものだった。もっと教えや智恵を学びたかったし、もっとお話をしたかった。本当に無念で悔しい思いでいっぱいだ。

\*

学問や思想の話以前に、たった4年間という短い間だったが、徐京植さんにはいろんな面で大変お世話とご迷惑をおかけしたことが多々あった。

かつての自分は、朝鮮右翼的(?)な歴史認識、旧態依然とした家庭で育ち朝鮮学校に通うなかで社会や歴史

に対する違和感、疑問であふれていたが、徐さんの思想によって、それまでの固定観念や偏見とともに打破された。ただ、それ以外で、少し身の上話だが個人的にもご迷惑をおかけした。

大学2年生の頃、学業と活動を両立するにはバイトだけでは苦しく、奨学金申請したとある奨学金に落ちてしまい落胆する中、徐さんは相談を聞いてくれた。また大学3年の終わり頃、進路について父と親子喧嘩し10日間家出したのだが、そんな時も徐さんは家庭環境や進路について親身になって聞いてくれた。徐さんにとっては迷惑だったかもしれないが、社会にも将来にも希望を持たず苦しんでいたあの時自分の話を聞いてくれなかったら、いまの自分は無かったかもしれない。

\*

徐さんはとても穏やかな物腰でいつも他者を気にかける人格者であったが、一方で世界をめぐる問題について情緒的で刺激的な言論を展開していたのは、「人間性」という「問い」と「新しい普遍性」という「夢」を、決してゆずれない倫理的命題として自己の根幹に据えていたからだった。とても真摯な徐さんだからこそ、自分は心の底から尊敬し、自分以上に徐さんを慕っている人は多いのだろう。

徐京植さんの思想や活動原理について、自分は先達ほど詳しくないし、まだ思想的な核心を把握できていないつもりもない。ただ、自分が大学生時代、常日頃徐京植さんと話を交わす中で、ふと垣間見える「根本」——在日朝鮮人としての責任と倫理について考えさせられる事がとても多かった。今の自分に正確に言語化する実力も自信もないが、徐さんの話や言論、著作を見ながらこういう考えに至った。

——在日朝鮮人は、常に既に「世界」の向こう側に、先に進まなければならない、と。

\*

2019年9月以降、自分は〈1923 関東朝鮮人大虐殺を記憶する行動〉というグループを通して関東大震災時の朝鮮人虐殺問題に携わるようになった。キッカケは、関東大震災時に曾祖父が東京で数奇な縁で生き延びた事をむかし父から聞かされていた自分が、2019年以降の日本社会の状況をまえに居ても立っても居られなくなったからだ。

ただいま思うと、朝鮮人虐殺についての自分の思考が、在日朝鮮人の歴史とナチスのホロコーストやパレスチナイスラエルの状況を重ねて思索した徐さんの思考を参照軸にしているのは、そんな自分のルーツが関わっていたと最近になって気づく。

関東大震災時朝鮮人虐殺は2023年で100年を迎えたが、この問題について日本政府は未だに知らぬ存ぜぬを決め込んでいる一方で、日本の社会運動や市民運動がどれだけ理解を深めたのか疑問が残るし、パレスチナイスラエルの状況を前に、徐さんの思考がより必要性を増していると確信する。

\*

日本と世界は変革しなければならない——そういう意志を胸に、大学卒業式後、徐さんの研究室で社会変革を志す社会人として決意を述べた際、徐さんは自分に対してこのような餞の言葉を贈ってくれた。

「池君。これから様々な困難が立ち塞がっているだろうし、その中でいろんな日本人や在日と出逢って共に闘っていくだろうけど、この事だけは肝に銘じなさい。君は「主体(チュチュエ)をどこに立てるべきなのか」、をだ。」

徐さんのこの言葉には、在日朝鮮人として様々な困難を経験してきた一生が凝縮されている。それは、池允学という人間に向けた「戒め」の言葉なのだが、逆説として徐さん自身にも向けていたように思える。

世界で起こっている帝国主義・植民地主義の後遺症に悩まされる人々は今後も加速度的に増えているが、それは今年朝鮮人虐殺101年を迎える日本も例外ではない。

徐京植さんが伝えようとした思想を、私たちが実践するときだ。天皇制日本を、全てを、いまの私たちの手で終わらせなければならない。

この世を去った徐京植さんも、帝国日本の犠牲になった人々も、世界も、いまそれを望んでいる。「終わらせてくれ」と。

---

## 徐先生へ

はまむ (濱村美郷)

こんにちは。先生。はまむです。追悼文を頼まれました。でも私はまだ先生が、「はまむ、わたしです」とソウルに到着したという連絡をくれる気がして。先生がいつも滞在されていたホテルの前を通る度に、鮮明に、空気や声や表情が溢れてくるのです。日本大使館の前、水曜デモが続いている、あの場所は先生のことを記憶しているんです。きっとまだ、もう実際には会えないことを認めたくないのかもしれない。

よくこんなことを考えていました。誰かが死んでしまっても、そのことを知らなければきっとその人は、誰かの中ではずっと生きているのだと。

だからわたしは臆病で先生は私の世界ではきっと生きているんだって言い聞かせているのです。

先生は私にとって先生でもあり、尊敬する友だちで、同志だったんです。

誰かがどこかで、差別され、抑圧され、殺され、それでも何事もなかったかのように動いていく世界に、怒り、絶望し、それでも語ることをやめなかった。

届かないと分かっている、語らざるを得なかった。

先生の存在は、絶望の世界を生きる人びとの同志だったのです。

そして、闘いを続ける多くの仲間たちと同じ表情をしていたのです。

絶望し、怒り、悔しくて涙が出てしまう、そんな事がある度に先生の存在を思い出していました。

正しくあるとはどういうことで、変わらずに生きていくことがどれほど難しいことか。

正しくあろうとした人たちは、みんな死んでしまったのです。

本当を見つめた人たちはみんな「正常」でなんかいられないんです。

この世界が、人間が、残酷で、卑怯で、絶望なんです。

でもそれでも、わかっている、語らざるを得ない、闘わざるを得ない人たちがいて、そんな存在は先生と似た顔をしているんです。

私は一体どこにいるのでしょうか。

最後になるなんて思わなかったソウルのホテルで先生と話したことを覚えています。

ウクライナの戦争が長期化し、先生が長野に戻られた頃にガザへの攻撃がはじまりました。

先生はその頃、現実を直視すると辛すぎて、「普通」でいることなんてできないと言っていました。だからといって、忘却して生きていくことも出来ず、わたしたちはその間でどうやって生きていくべきなのか、長い沈黙が流れたのを覚えています。

その沈黙はまだ続いているのです。

レインボーフラッグがイスラエルの軍人によってガザでなびいているグロテスクな社会で、ホームレスの女性が殴られて死ぬ社会で、放射能がなかったことにされる社会で、障害者の家族が餓死する社会で、在日朝鮮人であること、アジア人やムスリムであること、トランスジェンダーであることが差別や抑圧、暴力を正当化する社会で。

私たちは誰かを殺してきたことすら忘れてしまいました。そしてもう自分の痛みすら感じないのです。静かで、凄まじい爆音で殺されていく社会でわたしたちはなぜ日常を紡ぐことができるのでしょうか。

風に乗って、誰かの叫び声が聞こえるんです。

土は血の匂いを記憶しているんです。

私たちの両手は血まみれで、それでも明日が続いていくこのグロテスクさの中で先生の存在は魯迅の言う「地上の道」の先にいる人だったのかもしれませんが。でもその道は決して平坦ではなく、陰しく、泥だらけで、真っ暗だったはずで。

霧の中で微かに見えていた先生の背中をいつも追いかけていたのかもしれませんが。道しるべを失った今、途方にくれるしかないけれど、薄まっていく私を保つには、しっかりと暗さを確認するしかないんです。

そして、その絶望は、もしかしたらいるかもしれない、記録されてこなかったけれども確かにそこにいた、「声」として「認められて」来なかった人びとの存在に対する想像力を含んでいるんだと思います。それがきっと先生の言う、「希望」なんだと思います。だから今はしっかり絶望するしかないんです。

先生はきっと、読んでいないかもしれません。

先生にメールをしていたんです。亡くなったと聞いている丁度その頃に。

済州での行った展示のお知らせでした。

春は苦しいんです。

たくさんの方が死んでしまった季節で。

悲しみの季節で。

春の悲しみは、共通の記憶で社会の記憶で。

春が希望や雪解けの季節なののでしょうか。

返事が来ないメールにはこんなことを書いていました。

4月20日は、韓国では障害者差別撤廃の日で一年で一番大きな障害者差別に抵抗する人びとの権利闘争の全国大会があります。同情や誰かの為じゃなく、自身の問題として抑圧されている存在との連帯と共闘を先生から学びました。先生ならきっと集会に行きなさいと言う気がして。私は街頭を守ります。

---

## 在日朝鮮人・徐京植を偲ぶ

権赫泰 (クオン・ヒョクテ)

本文章は韓国の総合季刊誌『黄海文化』122号(2024年3月)に掲載された「在日朝鮮人徐京植を見送りながら」を筆者が直接翻訳したものである。その際、一部加筆・省略をしたこと、また筆者の能力不足と時間の制約のため、ぎこちない表現や文章が多く含まれていることを予めお断りする。ご理解を賜りたい。

徐京植(以下、ソ・ギョンシクと記す)が2023年12月18日に逝った。ソ・ギョンシクはかつて在日朝鮮人の死を、スイッチを切ったように突然消えてしまうと形容したことがあるが、その形容のように本当に突然私たちのそばを去った。1951年京都生まれのため、72歳である。早すぎる。東京経済大学を定年退職したのがたった2年前であり、まるで退任を待っていたかのように旅立った。1980年代半ばに初めて会い、その後途切れ途切れに、

2000年代からは比較的頻繁にやりとりをしていたソ・ギョンシクとの「つながり」は、これでいったんこの世では完全に途切れてしまった。無念さを感じる。

訃報を聞いて真っ先に思い浮かんだのは、彼の多くの著書の至る所に欠かさず登場する死に関するフレーズだった。私的な場で死について話を交わした記憶はほとんどないが、彼の本は死にとっても寛容である。プリーモ・レーヴィ、ジャン・アメリなど、彼を通じて新たに知った人々から、フランツ・ファノン、エドワード・サイード、尹東柱、ガッサン・カナファーニーなど、ある程度聞き慣れた人々まで、「ディアスポラ」を生きた人々の人生と思考の軌跡を、ソ・ギョンシク特有の簡潔かつ精緻な文章を通して新たに知ったのは私だけではない。しかし、彼の文章を吟味していき、「あ、そうなんだ！ そうだったんだ！」と感心して「油断」していると、必ずと言っていいほど、崖っぷちから突然の転落のように死の文章に唐突につき当たる。例えばこうだ。「1936年生まれのカナファーニーは、2歳の時に家族全員が難民になった。難民キャンプで育ち……」という説明を追っていると、突然「1972年、ペイルートで自動車に取り付けられた爆弾で殺害された」という一節に突き当たる。難民生活の果てに死を位置づけるというより、まるで死を書くためのプロローグのごとくディアスポラとしての生活が登場するかのようだ。

そのため、訃報に接するやいなや、彼の本に登場する死のフレーズを思い浮かべながら、どうにかして悲しみを呑み込み自分を納得させようとする私自身の態度に腹が立った。もちろん、すべての死は生命との「残酷」な断絶を意味するものだが、ソ・ギョンシクがハンナ・アーレントの言葉を借りて、死を「ようやく肩の荷物を全て下ろしたんだなど快活に考えてみたり」、あるいは「握りしめている紐を手離せばそれでおしまい」と書いたからといって、彼の突然の死を私自身にそのまま納得させることはできない。ましてや彼が、自分が死んだとしても所属大学の「学内便覧に小さな訃報が載るだけ」と自らの死を「無意味」なものと言ったからといって、少なからずの期間、彼との出会いを通して私の体と心に染み込んでいる彼の思想や痕跡を自分の中にだけ閉じ込めておくわけにはいかない。

そこで、彼との個人的な逸話を中心に、ソ・ギョンシクに関する記憶を辿ってみることにした。ただし、その範囲は出会いが最も頻繁だった2011年頃までとする。日本語で話すときは「ソ・センセイ」、韓国語で話すときは「ソ先生ニム(様)」と呼び、酒の席では冗談めかして「キョンシク兄さん！」と言いたくなることもあったが、本稿では敬称を略してソ・ギョンシクと呼ぶことにする。

ソ・ギョンシクとの縁は、短くはない。おそらく1986年の秋頃だろう。東京で留学生活を送っていた時だった。今は亡き北朝鮮の専門家であるソ・ドンマン(徐東晩、元尚志大学教授)と意気投合し、何かやってみようと、なけなしの金をはたいて、東京郊外にちっぽけな事務所を借り、資料も集めながらあれこれと模索していたときだった。今思えば、かなり無茶苦茶なことをしたわけだが、この手の仕事が大抵そうであるように、頼まれ事を断りきれず、次から次へと引き受けているうちに、いつの間にか後戻りできない状態になることが多い気がする。とにかく、しづしづこのような仕事を始めたものの、孤立と困窮は免れそうもなく、結局、あちこちに助けを求めるしかない状況になってしまった。ときは全斗煥政権の末期で、しかも政治的なことに敏感と言えば「世界一」の日本であったため、助けを得るのは容易ではなかっただけでなく、一步間違えば、大げさに言って「永遠に」帰れないかもしれない恐怖すらあった。しかし、結局、当時の韓国政府が嫌がる「危険人物」、すなわち「ブラックリスト」に助けを求めるしかなかった。もちろん、助けといっても、大抵は人を紹介してもらったり、資料や書籍などの提供を求めたりすることに過ぎなかったが。

当時私たちには高価だった新幹線に乗って京都まで行き、当時韓国政府にとって「危険人物」の代表格であったソ・ギョンシクに会ったのはそのためだった。年齢が8歳離れているので、おそらくソ・ギョンシクは30代半ば、私は20代半ばくらいだったろう。この時のソ・ギョンシクは、透き通るような清涼感のある顔とは対照的にほとんど変化のない暗い表情だったことを今もはっきりと覚えている。韓国語と日本語を交えながら会話したが、言葉も少なく訥訥と語った。後日、おそらく2006年頃だったと思うが、ソ・ギョンシクにこの時の出会いについて尋ねたことがあるが、予想通りほとんど覚えていないという答えが返ってきた。私自身も、場所が京都のとあ

るカフェだったこと、そして会話をした時間がそれほど長くなかったこと以外はほとんど記憶にないので、当然といえば当然である。ただ、ソ・ギョンシクがこの時期を後に「非日常的な放浪」、そして「居場所探しという毒薬に麻痺したかのように10年以上の生活を漫然と過ごしてしまった」と書いているように、母と父が相次いで亡くなり、10年以上も閉じ込められていた二人の兄たちの救援運動に追われていた当時の状況では、憂鬱な無表情は当然のことであつたらう。しかも、正体不明の留学生が突然自分を訪ねてきたのだから、もしかしたら情報機関の手先かもしれないと警戒した可能性もあつたという。

しかし、当時の私には、恥ずかしながら、在日朝鮮人が置かれている状況についての知識も関心も考えもほとんどなかった。しかも、ソ・ギョンシクは、一人の作家としてではなく、韓国の刑務所に収監されている二人の兄たちの弟としてのみ記憶に刻まれていた。

ソ・ギョンシクはすでに1970年代からあちこちに文章を書いていたと思うが、主に二人の兄たちに関連した文章が中心だったので、ソ・ギョンシクという存在をソ・スン、ソ・ジュンシクと切り離して考えることはできなかった。今でも私の書斎の本棚に置いてある、1981年にソ・ギョンシクが編訳して日本で出版された『徐兄弟・獄中からの手紙——徐勝・徐俊植の10年』（岩波新書、1981年）というタイトルの新書は、私がソ・ギョンシクの著作の中で最初に購入した本である。この本には、ソ・ギョンシクが日本語に翻訳した二人の兄たちから受け取った獄中の手紙の一部と、ソ・ギョンシクが解説した序文と後記が掲載されている。今のソ・ギョンシクの文体とは異なり、まるで社会科学の論文のように「乾ききった」、極度に節制した文体で書かれている彼の文章を読んでいると、当時のソ・ギョンシクがいかに自分を「殺し」、二人の兄たちの弟、または支援者としての役割に徹しようとしていたのかが痛いほど伝わってくる。だから、当時の徐京植に「わたくし」という主語はなかったのかもしれない。そうするしかなかったのだろう。それでもこの本の「あとがき」からは、わずかながら彼の悩みの片鱗を垣間見することもできる。すなわち、「私にとっては、兄たちの生きている姿それ自身が、私自身と「民族」との関係についての根源的な問いである。私は私なりに、過去10年間、この問いを反芻してきた」と書いているように、徐京植にとって、二人の兄の生と「民族」という問題は切り離せない問題だった。やや大げさに言えば、徐京植にとって、刑務所に閉じ込められている二人の兄たちは「民族」と同義であり、そしてそれは「自分」でもあつた。「わたくし」という主語は二人の兄たちを経由して「民族」に収斂・埋没していたともいえる。

ソ・ギョンシクの二人の兄との関係は、ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ (Vincent van Gogh) の墓地を訪ねたときの逸話にもよく表れている。彼がここで見たのは、ゴッホの墓の傍らに横たわるゴッホの弟テオ・ヴァン・ゴッホ (Theo van Gogh) の墓碑だった。テオの墓碑を見て、ソ・ギョンシクは、33歳、つまり当時の自分と同じ年齢で亡くなったテオの死について「これは**殉死**だったのか」と書いている。弟テオの死を兄ゴッホに対する「殉死」と考えると、テオはゴッホと4歳違いだ。

ソ・ギョンシクがゴッホの墓を訪れたのは、1969年の韓国訪問から15年ぶりに日本を離れたヨーロッパ旅行の時だった (1983年11月)。二人の兄の収監期間がほぼ15年に入り、母親に続いて父親が1983年5月に逝去した後でもあつた。さらに、旅行中に当時ビルマで発生したランゲーン事件 (10月9日) のニュースを偶然耳にした直後でもあつた。パリでこの知らせを聞いたソ・ギョンシクは、この事件で韓国での緊張が急速に高まり、二人の兄の安否に危機が訪れるかもしれないと心配を募らせる。1971年から変わったことは何一つない。むしろ悪くなるだけであつた。15年も経ったのに、ソ・ギョンシクがテオの死に自分の運命を重ね合わせざるを得なかったのは、このような事情があつたからだ。

『私の西洋美術巡礼』や『私の西洋音楽巡礼』、そして『子どもの涙』を読んで、「墮落」しきった泥沼の現実を忘れさせてくれるような、絵画や音楽の「純粹」の世界、あるいは幼い頃の美しい、おとぎ話のような、水彩画のような読書の思い出に吸い込まれて「安心」していると、突然、髪の毛が逆立つような仮借なき現実にゆり戻される文章が、二人の兄たちの問題で必ず登場する。ゴッホの絵を見ている、ゴッホ兄弟の墓碑を見ている、ソ・ギョンシクは「二人の兄」に戻り、そして自分自身に戻る。

2007年頃だったと思う。こんなことがあつた。ソ・ギョンシクは在日同胞の中では非常に珍しく、両親が忠清

道（忠清南道）出身である。そのため、半ば軽い冗談で「先生、私も忠清道です。大田（デジョン）です」と言ったことがあった。すると「ああそうですか。同郷の方ですね」と言った後、少し間を置いて、やや「緊張した」表情で「大田は私の兄二人が収監されていた大田刑務所があるところですね」とおっしゃった。日本で在日同胞政治犯救援運動に関わっていた人たちにとって、大田は少し「有名」なところである。いや、正確には「悪名高い」ところである。政治犯、なかでも在日コリアンの政治犯が多数収監されていた場所だからだ。私はその大田刑務所から徒歩で10分もかからない中学校に通った。私が中学生だった頃、すぐ隣にソ・ギョンシクの二人の兄たちが「住んでいた」のである。もちろん、それに気付かなかった私をソ・ギョンシクが咎めたわけではないが、当時、彼を取り巻くすべてが彼にとって「民族」の問題であり、その「民族」の問題は兄たちの運命だった。

筆者の感覚で文章を大まかに区分けすると、人文的なものと社会科学的なものがある。社会科学的なものは、主体を対象から徹底的に切り離すことができるという前提に立っている。対象の影響から離れることで、価値中立的な客観性を実現できるという発想である。しかし主体もまた特定の歴史の拘束物である以上、対象から自由になることは容易ではない。これに対し、人文的なものは、対象から自由でない前提に立ち、主体である「私」の問題を扱う。正しいかどうかはともかく、「私」は歴史の拘束物であり、その歴史と様々な形で絡み合っている。一種の連累である。その絡み合いの糸をひとつひとつ解きほぐしていくのは、もちろん大変なことだが、その回路に「私」を重ね合わせることで、時空を超えたある種の共感を引き出す。絡み合いへの探究こそ共感の出発点であり、人文的な文章の始まりである。ソ・ギョンシクの文章は、このような人文的文章の典型である。「私」を時代との緊張関係の真ん中に置き、その葛藤の絡みをひたすら解きほぐしていく。時代との絡みと葛藤は、つねに二人の兄たちの長期間の拘禁などを通じて浮き彫りにされる。だから彼の文章には「飛躍」がない。

だからといって、ソ・ギョンシクの世界観がすべて二人の兄たちの軌跡によってのみ形成されたと言うつもりはない。1960年代後半はソ・ギョンシクにとって非常に重要な時期である。一般に「反乱の時代」と呼ばれる60年代がソ・ギョンシクに与えた影響は大きい。60年代といえば、ヨーロッパやアメリカではよく「68年」、日本ではベトナム反戦運動や「全共闘」、韓国では日韓協定反対や3選改憲反対で記憶される時期だが、ソ・ギョンシクにとってはこれに加えて、李珍宇、金嬉老、梁政明事件の時期でもあった。さらに、個人的には1966年に初めて韓国を訪れ、1967年と1968年には二人の兄が韓国に留学した時期でもあった。1969年に早稲田大学文学部に進学し、一時は二人の兄たちの後に続いて韓国へ留学するか、あるいは大学院進学を夢見ていた時期でもあった。永住帰国も念頭に置いていた。日本人と自分は違う、だから人生の現場はここ（日本）ではないと考え、悩みに悩んだ時期でもあった。

ところが、1971年に二人の兄が逮捕されると、約20年近く、つまり1988年に徐俊植が、そして1990年に徐勝が釈放されるまで、年齢的には20歳の青年が40歳を目前にした壮年になるまで、二人の兄と切り離せない「同一運命体」の生を強いられることになる。当時、二人の兄の釈放は韓国よりも日本で大きく取り上げられた。当時日本に住んでいた私は、日本のテレビ局に呼ばれ、韓国から送られてくる二人の釈放のニュースと各種資料を日本語に通訳・翻訳するアルバイトをしていたが、この時、ソ・ギョンシクの発言や文章に接した記憶も残っている。当時の私にとっても、二人の兄たちの運命とソ・ギョンシクは切り離せなかった。

それ以来、彼と直接会って会話を交わしたことは、少なくとも1990年代まではなかった。二人の兄の釈放後、彼は作家として名を馳せており、私は遠巻きに聴者としてあるいは読者としてソ・ギョンシクを眺めていた。この時期に発表されたソ・ギョンシクの文章は、当時、日本の生活に疲れていた私には一種の「解毒剤」のようなものだった。特に「[昭和]の終わり」と朝鮮」という文章（1989年）は、天皇ヒロヒトの死とその意味を日本内部に問い糺す文章で、日本の天皇制と「戦後」を考える上で欠かせない文章だった。この文章は後に私が翻訳し、韓国で2011年に出版された『言語の牢獄で』に掲載されることになる。この文章をはじめ、1990年代にソ・ギョンシクが書いた文章から日韓関係や在日朝鮮人の現実と歴史だけでなく、日本の「戦後」に対する批判的な問題意識を多く学んだが、特にソ・ギョンシクの鋭い「戦後」批判は、私の日本認識の最も基本的な出発点となった。

そして2003年2月14日から15日までの2日間、韓国の淑明女子大学で開かれた「ポストコロニアル時代の在日朝鮮人」という会議で、ソ・ギョンシクとの再会を果たす。この会議の主催者である尹京媛の助けで当時の記録を調べてみると、参加者名簿にはソ・ギョンシクをはじめ、宋連玉、金富子、崔徳孝、崔真碩、高和政、金貴粉、林恵英などの在日朝鮮人知識人に加え、中野敏男、岩崎稔、藤井たけし、板垣龍太、テッサ・モーリス＝スズキ、尹京媛、金恩實、権赫範、尹海東、ベ・ジソン、ペ・ドクホ、イ・ヨンジン、カン・ソンヒョン、権赫泰などの名前が見られる。この会議は、韓国・在日朝鮮人・日本人知識人たちが「素顔」で会う、最初の公開的な場だった。この場に呼ばれ発表することになった私は、ソ・ギョンシクをはじめとする他の参加者の発表と討論に圧倒された。特にソ・ギョンシクは、事前に配布された「在日朝鮮人は民衆か」という既存の原稿に加え、主に韓国社会における在日朝鮮人の呼称問題を扱ったが、ここで受けた知的刺激は、後に私が韓国社会の在日朝鮮人への呼称問題に関する研究を進める上で決定的な影響を与え、「在日朝鮮人と韓国社会 — 韓国社会は在日朝鮮人をどう「表象」してきたか」（『歴史批評』2007年）という論文に結実した。この再会が直接的なきっかけだったとは言いきれないが、2006年から約2年間、ソ・ギョンシクを聖公会大学に客員教授として招聘することになり、この期間中、ソ・ギョンシクは韓国で旺盛に執筆・発言する。

それから、『黄海文化』という総合季刊誌に在日朝鮮人の特集を組みたい、執筆陣は全部在日朝鮮人にしたい、韓国生活の経験を生かした原稿を載せたいとソ・ギョンシクに提案したところ、ソ・ギョンシクが快く応じてくれ、「ポストコロニアル時代の在日朝鮮人」という特集が『黄海文化』2007年秋号に組まれることになる。ちなみにこの特集に貴重な玉稿を寄せてくれたのは徐京植、趙慶喜、イ・ソン、高和政、金富子、宋連玉、鄭栄桓である。それまで日本問題としてしか扱われなかった在日朝鮮人を韓国社会内部の問題として捉えようとするこの特集企画の問題意識は、前述の2003年の会議に端を発していた。この特集にソ・ギョンシクは韓国社会での生活経験をもとに「母語と母国語の相克」という文章を寄稿したが、この文章はソ・ギョンシクが在日朝鮮人として初めて経験した「母国」での生活経験がなければ書けない内容であった。この記事には、韓国・日本の言語ナショナリズムを批判する在日朝鮮人としてのソ・ギョンシクの問題意識が鮮明に表れている。参考までに、原稿依頼の承諾メールに記されているソ・ギョンシクの以下のようなメモを見ると、ソ・ギョンシクが韓国社会で何を見、何を批判し、何を目指していたのかがよくわかる。

「ネイティブスピーカー（母語保持者）は自分の言語を疑うことがない。自分たちの言語だけが基準であり、標準だから。彼らの外に標準的な言語があるはずがない。逆に「在日朝鮮人」は、どんなに日本語が上手でも安心できない。標準は常に在日朝鮮人の「外」にあるからだ。外国人なのに言葉が上手い、自国人なのに言葉が下手、この構図。言語ナショナリズムの克服（韓国と日本双方で）。多言語／多文化共同体（「統一朝鮮」へ）」（2007年7月25日、徐京植氏より受信）

そして2011年には、ソ・ギョンシクの依頼で、既発表の文章からいくつかを選んで韓国語に訳した『言語の牢獄で』を出版することになる。2003年から2011年まで集中的に、そして途切れることなく行われたソ・ギョンシクとの頻繁な出会いとその結果が、私にとってはこの本に結実したことになる。

今思えば、2000年代以降のソ・ギョンシクをはじめとする多数の在日朝鮮人との出会いと、その結果としてこのような「公論の場」ができたのは決して偶然ではない。ソ・ギョンシクとの「自由なる」出会いが、二人の兄たちの釈放に象徴される韓国の民主化の結果であったのと同じく、2000年代以降の在日朝鮮人との「公論の場」の出現も、韓国の「民主化以後の民主主義」を考える上で欠かせない大事な問題だからだ。金大中・盧武鉉政権の発足とそれによる「開かれた空間」が作られなかったら、このような「公論の場」は不可能だったと思う。李明博・朴槿恵政権のもとでは、この「公論の場」が制約された条件で辛うじて生き残り、今日に至っていることも付記しておく。

さて、このような「公論の場」は何を意味したか。光栄にもその頃ソ・ギョンシクと並んで壇上に上がる機会

を多数得たが、その中でも、ある会議で、ある「韓国人」聴衆から私が「元在日朝鮮人」と呼ばれたことが今でも強く記憶に残っている。日本滞在期間が決して短くなかった私だが、その間に「在日朝鮮人」と呼ばれたことはもちろん一度もなかった。私は戸惑った。その理由は「朝鮮」という言葉ではなく、「在日」という呼称のせいだった。質問者の意図がどこにあったのかを確認することはできなかったが、ソ・ギョンシクが酷く嘆いていたことはいまだに鮮明に記憶に残っている。日本で自分を「在日」と自称する日本人がいるという話を聞いていた頃だった。その頃、韓国でも在日朝鮮人を「在日」と呼称する人が増えていた。もちろん、略称で「在日」と呼称する場合もあるが、「在日」を居住空間の意味としてとらえ、「在日」という呼称を好む人も多くなってきた。この論理からすれば、私は「在韓」として生まれ育ち、日本に留学して「在日」になり、帰国して再び「在韓」になるのだ。また、ソ・ギョンシクは「在日」に生まれ育ったが、韓国に移り住めば「在韓」になる。日本に住む日本人はすべて「在日」であり、韓国に住む韓国人もすべて「在韓」になる。人は単に居住空間としてのみ規定され、国籍・人種・民族・階級はすべて平面化される。

ソ・ギョンシクにとって「在日」と「朝鮮人」は切り離せない。ソ・ギョンシクが他国に移り住んだとしても、あるいは国籍に変動が生じたとしても（その可能性は全くなかったが）、ソ・ギョンシクが「在日朝鮮人」であることに変わりはない。

ソ・ギョンシクは2006年度から2年間韓国に滞在し、多くの文章を通じて、また多くの講演会などを通じて一定の「有名人」になった。同時に『ディアスポラ紀行』の韓国語訳の出版のおかげで、「ディアスポラ」という言葉も急速に広まったが、「誤解」も「誤読」も増えた。ソ・ギョンシクの「ディアスポラ論」あるいは「在日朝鮮人論」を、国境や国籍・民族などに関係なく、世の中を、世界を自由に行き来する「ノマド」的な生き方であるかのように受け止める人が多数生まれた。特に韓国の「ナショナリズム」にうんざりしていた人々は、ソ・ギョンシクの「ディアスポラ論」に救いを求めた。実際、ソ・ギョンシクの考えは「正反対」だったので、いくら読者の解釈次第とはいえ、厄介な誤読に違いない。だから、ソ・ギョンシクに半分冗談めかして「これについて責任を取ってください」と愚痴をこぼしたことがあった。

ベルトルト・ブレヒトはナチス時代に「暗黒の時代に果たして歌を歌うことができるのか。歌うことはできる。闇についてだ」と書いた。ブレヒトのように各所を転々としたわけではないが、ソ・ギョンシクは「闇の時代」を生きて書いた。朝鮮半島に在日朝鮮人の生を「帰還」させようとしたのではなく、在日朝鮮人の生として朝鮮半島を変えようと、また世界を変えようと書いて生きた。私にとってソ・ギョンシクはフランツ・ファノンであり、エドワード・サイードである。ファノンがアルジェリアの経験を、サイードがパレスチナの経験を普遍的な歴史認識として拡張したように、ソ・ギョンシクは朝鮮半島と在日朝鮮人の経験を抵抗の思想として普遍化しようとした。だから彼は絶えず過去を呼び起こした。その過去は、現在の安穏な生活を絶えず揺るがす過去である。韓国でも日本でも同じだ。だから彼は在日朝鮮人として、『『過去の亡霊』である。その責任を最後まで背負いたい』と語るのである。

## 《紹介》 韓国、日本の新聞計報記事

※ 当日の配付資料では、参考として、『ハンギョレ新聞』2023年12月19日掲載の追悼記事「在日朝鮮人作家の徐京植さん死去…「ディアスポラ」の多難な生涯を終えた」（チェ・ウオンヒョン記者）の翻訳（李杏理）をご紹介しますが、配信版では省略いたします。

### 【参考 韓国における計報関連記事】

『ハンギョレ新聞』2023.12.19 「在日朝鮮人作家の徐京植さん死去…「ディアスポラ」の多難な生涯を終えた」  
『プレシアン』2023.12.19 「徐京植・東京経済大名誉教授、18日他界」  
『NEWSIS』2023.12.19 「「ディアスポラ紀行」を続けた徐京植教授、他界…享年72歳」  
『釜山日報』2023.12.20 「在日朝鮮人作家・徐京植他界」  
『朝鮮日報』2023.12.20 「在日「ディアスポラ知識人」徐京植教授、死去ほか」  
『ハンギョレ21』2023.12.22 「徐京植、不幸という話もできなかった人びとの側に」  
『ハンギョレ21』2023.12.22 「縛られた人」  
『韓国日報』2023.12.22 「徐京植がきれいでない絵を選んだ理由」  
『世界日報』2023.12.22 「徐京植先生と詩の力」  
『京郷新聞』2023.12.26 「生と死のあいだで：故・徐京植先生を称えて」  
『釜山日報』2023.12.27 「徐京植教授を哀悼して」  
『慶南新聞』2023.12.28 「隣人がいる ムン・ジョオン（詩人）」  
『朝鮮日報』2023.12.31 「ほのかな百済の仏像のように…別の世界を夢見る絵」  
『京仁日報』2024.01.04 「「ディアスポラ」徐京植を見送って」  
『韓国日報』2024.01.19 「パク・テグン「徐京植の問いは依然として進行形だ」」  
『連合ニュース』2024.01.25 「冷笑主義が蔓延る死の舞踏…今は理想が消えた時代」  
『中央日報』2024.02.13 「ディアスポラの墓」  
『釜山日報』2024.03.18 「統一した韓半島が在日朝鮮人の祖国だ」  
『ohmyNews』2024.03.15 「故・徐京植先生に遅ればせながら哀悼の意を表して」

※ 当日の配付資料では、日本国内での報道の事例として、『信濃毎日新聞』2023年12月20日掲載の計報記事「作家の徐京植さん死去 在日朝鮮人2世」（鶴飼哲さんコメント「ユーモアある知識人 松本の鶴飼哲さん 悼む」含む）をご紹介しますが、配信版では省略いたします。

【関連シンポジウムのご紹介】

追悼シンポジウム 在日朝鮮人と韓国社会 — 徐京植の生と思想

日時：2024年7月12日（金）13時～18時      날짜：2024년 7월 12일（금）13시～18시  
場所：聖公会大学      장소：성공회대학교  
主催：聖公会大学東アジア研究所

第一部では、故・徐京植さんの思想の軌跡や韓国での活動を中心に、在日朝鮮人と本国との関係について幅広く議論する。第二部では、徐京植さんとの縁の深い方々を迎え、個人的な思いやエピソードを含めて発言をいただく。

《プログラム》

開会の辞：金東椿（キム・ドンチュン／聖公会大学）      개회사 김동춘（성공회대） 13:05~13:15  
基調発言：韓洪九（ハン・ホング／聖公会大学）      기조발언 한홍구（성공회대） 13:15~13:25

第一部 徐京植の生と思想      1부 서경식의 삶과 사상 13:30~15:40

司会：康誠賢（カン・ソンヒョン／聖公会大学）      사회: 강성현（성공회대）  
報告1：権赫泰（クオン・ヒョクテ／聖公会大学）      권혁태（성공회대） 13:30~13:50  
報告2：趙慶喜（チョウ・キョンヒ／聖公会大学）      조경희（성공회대） 13:50~14:10  
報告3：李鍾贊（イ・ジョンチャン／文化評論家）      이종찬（문화평론가） 14:10~14:30  
報告4：沈雅亭（シム・アジョン／独立研究者）      심아정（독립연구자） 14:30~14:50  
討論1：申知瑛（シン・ジョン／延世大学）      토론: 신지영（연세대）, 권성우（숙명여대）  
討論2：権晟右（クオン・ソンウ／淑明女子大学）      14:50~15:20  
その他質疑応答      기타 질의응답 ~15:40

第二部 ラウンドテーブル：徐京植と人々

2부 라운드테이블: 서경식과 사람들 16:00~18:00

進行：尹京媛（ユン・キョンウォン／独立研究者）      진행: 윤경원（독립연구자）  
趙眞碩（チョウ・ジンソク／書店イウム）      조진석（책방 이음）  
金熙眞（キム・ヒジン／図書出版トルゴレ）      김희진（도서출판 돌고래）  
權寧敏（クオン・ヨンミン／哲学研究者）      권영민（철학연구자）  
鄭知恩（チョン・ジウン／文学評論家・ディアスポラ映画祭諮問委員）  
정지은（문학평론가/디아스포라 영화제 자문위원）  
徐台教（ソ・テギョ／コリアフォーカス編集長）      서대교（코리아 포커스 편집장）  
その他質疑応答および討論

問合せ：聖公会大学東アジア研究所 Tel 82-2-2610-4720, 82-2-2610-4771 / E-mail ieas21master@gmail.com